

かに

KANI



第10号

表紙のことは

癌と云う病気の概念がはっきりしたのは、19世紀中葉以後の事であるが、癌と云う言葉自体は、東西ともに可成古くから行なわれている。英仏語の **Cancer** は、ラテン語のままで、蟹の意味を兼ねている。そして、このラテン語はまたギリシャ語のカルキノスから来ている。2,400年前のギリシャのヒポクラテスは、すでに病気としてのカルキノスの特徴を書き記したと云う。西紀200年に死んだローマの医師ガレノスは、癌を「時に潰瘍を伴う悪性の極めて硬い腫瘍」と定義した。蟹の字をこう云う病気の名にしたのは、昔から珍しくない乳癌の恰好が、蟹を連想させたからであろう。赤黒い、凹凸のある、醜いその外観は、まさに蟹の甲羅そのものだが、腋の下のリンパ腺まで病気が拡がり、しかも、その間を繋ぐ、リンパ管までおかされた、乳癌の末期の姿は、蟹の鉗やその足の節々をさえ、連想させる。

一方癌の字は、中野操氏の考証によれば、南宋の医書にすでに用いられているそうだ。病だれの中品の山は岩石の意味で、やはり皮膚癌や乳癌の外観からの表徴文字と察せられるが、この字は癌の組織の持つ大きな他の特徴——他の組織と比較にならぬ程、堅い性質——まで表示し得て、妙である。

表紙の絵は「がごみ」と呼ばれる「わたりがに」の一種で、太平洋岸の日本近海に普通の、食用蟹の一つである。海底の砂に巧にもぐり込み、しかも、海を渡って遠くにまで行く。癌の持つ周囲組織へのもぐりこみ（浸潤）や、方々への飛び火（転移）は、この蟹の性癖で巧に表現されている。

題字の達筆は藤井理事長の揮毫である。編集部苦心の作と察せられるこの加仁は、草書では「かに」となる。仁術に加えるもう一つのもの——一般人の理解と協力——なくしては、癌撲滅の大目的は達成し得られない事を、言外にうたっているものと云えようか。蟹の周囲のあみ目の一つ一つは癌の細胞である。

(久留 勝)

加仁 第10号 目次

巻頭言

李廣將軍 飛將軍列伝……………長沼 弘毅…………… 2

加仁サロン

胃がんとWHO……………塚本 憲甫…………… 8

鼎 談

吉田富三先生を偲んで

石館守三 黒川利雄 中原和郎……………12

あしあと……………ビルロートとブラームス……………仁井谷久暢……………32

随 想……………ロバート・コッホと鎌倉……………渡辺 弘……………34

冬瓜の記

(1) 故緒方知三郎先生遺稿の始末記……………高谷 治……………38

(2) 元一患者の手記……………二宮 宏……………42

作品紹介……………“ありがとさん”……………45

横 顔……………相 川 エ ミ……………48

がんセンターめぐり……………千葉県がんセンターの巻……………50

質問コーナー……………白血病問答……………坂野 輝夫……………54

ニュース……………56

ご寄付芳名録……………61

「加仁」総目次(1~10号)……………66

点 描……………築地本願寺界限, 築地・明石町……………30, 69

財団法人がん研究振興会役員, 評議員名簿……………70

編集同人名簿, あとがき……………

◆表紙絵解説 久留 勝

◆表紙構成 長尾みのる

◆カット 山田喬 関谷猶二



☆巻頭言☆

李 廣 将 軍

— 飛 将 軍 列 伝 —



長 沼 弘 毅



史記には、興味ある人物が、多数出て来ているが、なかについて、
ぼくのもっとも引かれるのは、漢の李廣將軍である。
隴西成紀の出身。「廣の家、世世射を受く」とあるのは、彼の家系のお家芸は、射（弓）
であったことを意味する。

李廣は、文帝十四年（B.C. 一六〇）匈奴が入寇したとき「良家の子」というので召集され、軍に従って、意外の大功を樹てた。その後、辺境の任務についていたが、景帝に
いで立った武帝（B.C. 一四〇—八一）の即位した頃は、「左右もって廣を名將となす」とい
うくらいにまで、名声を博していた。結髪（一人前になる）してより、その最期に至る
まで、匈奴と戦うこと、大小七十余戦のヴェテラン、その間に、いろいろのエピソード
を残している。その二、三を紹介してみよう。

あるとき、景帝は、匈奴と戦おうとしている李廣のところへ、数十騎の「中貴人」（宦官）を応援に寄こした。かえって迷惑であったが、果せるかな、わずか三騎の匈奴にやられ、傷ついて本部にすがりついて来た。李廣は、彼等の傷をみて、「うむ、これは雕（大鷲）射ちだな」といった。あとで、捕えてみると、彼の推測は適中していた。そのときのこと、彼は、百騎の手勢をくり出し、みずから先陣に立った。これに対する匈奴は、数千騎であったが、李軍のあまりに少数なのをみて、「これは誘騎（誘い出しの兵——陽動隊）に違いない」というので、かえって、驚いて山に陣地を敷いた。李軍のほうは、みな怖れをなして逃げ帰ろうとした。これをみた彼は、「諸騎に令して」進め進め、と声を囁らした。

百騎をもって走らば、匈奴、我を追射し、立ちどころに尽きん。いま、我、留まらば、匈奴、かならず我をもって、大將軍、これを誘うとなし、かならず、敢えて我を撃たじ

というのであった。

さらに、また、匈奴の陣營、二里のところに着いたとき、彼は、「皆、馬よりくだりて鞍を解け」と命じた。敵前に馬鞍を解く、これは、よほど自信あつてのことではなければ、できることではない。寡勢をもって敵に対するときの作戦用兵上の大謀略である。

またあるとき、彼は、將軍（といっても、数千騎にすぎなかったが）として、雁門から長城の外に兵を進めたが、多勢に無勢、負傷して失神しているときに、生捕りにされてしまった。匈奴の兵は、二頭の馬の間に担架のようなものをしてしつらえ、彼を運んだ。ゆくこと十余里、息を吹き返した廣は死んだふりをしたままであった。薄眼をあけてみると、胡人の子供（胡兒）が、素晴らしい馬に乗って来るのをみつけた。李廣は、ガバとはね起き、その子供を打ち払って、その弓を奪い、その馬に乗って、「南に馳する」と数十里、追騎をばたばたと射殺して、友軍に帰った。しかし、失うところが多すぎた

というので、斬罪を宣告されたが、「贖いて（金を出して）庶人（平民）」となった。

彼は、ぶらぶらして数年をすごした。暇をみては、猟に出かけ、猛獣猛鳥を射って憂さを晴らしていた。ある日、一騎を従えて、猟に出たが、途中で一献傾けたりしているうちに、夜も更けてしまい、帰途、霸陵亭というところに辿り着いた。すると、暗闇から、「誰か？」という誰何の声聞こえて来た。随行者が、「故の李將軍がお出でになった」というと、その当直の衛士は、酒の勢いを借りて、「現役の將軍ですら夜行は許されない。予備の分際で、なにをいうか」と、剣もほろろの挨拶であった。假寝の宿は、かくして拒否されたのである。李廣、黙して、語らず。

その後、間もなく風雲急を告げ、彼は召されて右北平の太守に任ぜられた。李白、「塞下の曲」に、

烽火（敵襲を知らせるのろし）砂漠を動かし

連り照らす甘泉（地名）の雲

漢皇劍を按じて起ち

また召す李將軍

（後略）

李廣は、太守に任ぜられると、ときを移さず、先の衛士を呼び出し、ものをもいわすに斬殺してしまった。この辺は、大人物らしかぬところであるが、いかにも直情径行の士としての面目が躍如としている。匈奴は、彼のことを、「飛將軍」と称した。

李廣は、「人となり長（背が高い）にして、猿臂なり」といわれている。猿臂というのは、「臂の状、あたかも猿のごとくにして肩にまで通じてあり」ということなのである。この体格からして、射（弓）に適しているが、そのうえ天性の才能もあったようである。のみならず、豪胆と来ている。

その射るとき、敵の急（攻め来たりて急）をみ、数十歩のうちにあるにあらすして、

度りて中らざれば発せず、発すれば即ち弦に應じて倒るすなわち、敵が十分射程距離にはいるまでは、満を持して発せず、発すれば百発百中であつたのである。もつて自信のほどがうかがえるが、み方によつては危険千万なこと、彼の体からは、年中、負傷の跡が絶えなかつたという。

彼の射については、つぎのような件りがある。

廣出でて獵す。草中の石をみ、もつて虎となしてこれを射る。石に中りて鏃を没す。これをみるに石なり。因りて復たさらにこれを射る。終に復た石に入る能わず。石をみて虎と誤り、必死になつて振り絞つた矢は、ぐざりと石に突き刺さり、その鏃(矢尻)のところまで没してしまつた。そこで、もう一度といふので、石と承知のうえで射てみたら、ぱんとはね返るばかりで、矢が食い込むどころの騒ぎではなかつたのである。

似たような話は、ほかにもある。例えば、「呂氏春秋」「韓詩外伝」「北史李遠傳」などがその例であるが、どういふものか、李廣の場合ほど、人に知られていない。

林 暗うして 草 風に驚く

將軍 夜 弓を引く

平明(夜明け) 白羽(鏃の羽)を尋ねれば

没して石稜(石の角)の中にあり

右は盧偏の「張僕射が塞下の曲に和す」である。さらに、杜甫は、その「曲江」のうち、

(前略)

短衣匹馬 李廣に従い

猛虎を射るを看て残年を終わらん

といている。

元狩四年（B.C. 一一九）、彼は大將軍衛青に従い出征したが、こんどは、悲しい結末が待っていた。

——彼は、みずから単于（匈奴の王）と対決するつもりで、前軍になって進むことを申出でたが、「廣、すでに老いたり」との判断から聞き入れられなかった。

——陽動隊として東道（東方への迂回路）を命じられた。道案内（当時は、日月星辰をもって方角を得た）もなく、食糧も乏しい、進軍は、意のごとく捗らない。

——途中で道を失い、大將軍と合流する時機を失ってしまった。そのうち合流したときには、「時、すでに遅し」ということになってしまった。大將軍は、査問の役人を派して、李廣を責めさせた。すると彼は、「俺がいて、直接申し開きする」といって、その役人を相手にもしなかった。

廣、結髪より匈奴と大小七十余戦す。いま幸いに大將軍に従い、出でて（長城を出でて）、単于の兵に接せんとす。而るを大將軍また廣の部を徒す。行くに回遠せしむ（まわり道）。而してまた迷いて道を失す。豈に天にあらずや。且つ廣、六十余なり、終に復た刀筆の吏（俗吏）に対する能わずと。遂に刀を引き自頸す。

李白「古風」のうち一。

（前略）

善戦すれども功 賞せられず

忠誠 宣るべきことかたし

誰か憐む李將軍

白首にして三辺（匈奴の地）に没するを。

李白の最期は、惻惻として人の心を打つ。

（李廣）死するの日におよび、天下の知ると知らざると、みなために哀を尽せり。

……諺にいわく。桃李いわざれども、下おのずから蹊^{みち}を成すと。この言われなりといえども、もって大に喩^{たと}うべきなり。
「桃李いわざれども……」の句は、ここにはじまる。

筆者より。従来、なんとか医学に関連のあることをと、その涉獵に専念して来ましたが、それでは、あまりに範囲が限定されてしまいますので、これからは天衣無縫で参ります。読者に、少しでも、もの識りになっていただければ望外です。



加
ニ
サ
ロ
ン

胃がんとWHO



的内容やスケジュールを決めることであ
った。

この会議に参加したグループは、後に述べるように日本を含めて十一ヶ国の代表者であるが、誠に光栄なことには、胃がんの国際的会合となると、いつも日本はそのイニシアチブをとらされてしま
う。日本における胃がんの診断や治療の技術は世界中で最も優れており、また、胃がんの基礎研究も高く評価されているからである。それは日本人の器用さと勤勉さもさることながら、日本は世界中で胃がんが最も多い国だからかもしれない。考えようによっては国際会議でいい顔ができるということは、誠に不幸な話でもある。そんなわけで、第一回の会合と同様に、私はチェアマンに選ばれてしまった。

塚 本 憲 甫



議、その疲れをさっぱりと癒してくださいという好天と絶景であった。

国立がんセンターに国際胃がん情報センター (I R C = International Reference Centre) が設置されてから第二回目

の会議が、七月二十二日からジュネーブのWHO (世界保健機構) の本部で行なわれた。この会議の目的は、各国のその後の活動状況の報告とともに、世界の胃がん患者の登録や調査をするための具体

◇ジュネーブの会議

昭和四十八年七月二十七日、モンブランの空は抜けるほど青く澄みわたり、新雪に輝く山々はまぶしいばかりであった。降りみ降らずみの重苦しい空模様のもとで続けられた昨日までの五日間の会

本来私はがんの放射線治療関係を中心に生きてきた。胃がんの治療は手術が本すじであったために、正直いって、私が放射線医学研究所から国立がんセンターに移ってきた当時は、胃がんについては

ほんの表面的なことしか知らなかった。ところが、亡くなられた久留先生のあとをうけて、この国際胃がん情報センターの代表を引きうける頃から、がんセンターの各担当者は勿論、日本の胃癌研究会という専門家の集まりの絶大な支援をうけて、胃がんの猛勉強をさせられ、いつの間にか胃がんについて大抵のことは曲りなりにも頭につめこんでできてしまった。そんなわけで、私がこの会議の日本の代表、世界の代表となることに、日本の胃がんの専門家たちが文句もいわず、むしろあらゆる面で声援してくれるようになった。まことに有難いことである。

さらに、この会議には幸い国立がんセンター外科医長の三輪潔君がオブザーバーとして出席が許されたので、各国の代表、そのなかには国立大学の教授もいれば、国のがんセンターやがん研究所の代表もいて、専門分野も多岐に亘っているが、その集まりの熱心な主張や強硬な意見にもかかわらず、予定された議事を順

調に終え、所期の目的を達することができた。

日本へ戻ってから早速とりかからなければならぬ具体的な作業が重なお土産となつてはいるが、会議のみんなと別れを告げて、この日、私は三輪君と二人でモントレーの展望台に、素晴らしい気分で見つめていた。

◇国際胃がん情報センターとは

われわれ人類にとって最も恐ろしい病気であった疫病（伝染病）が次第に解決してきたために、成人病とともに「がん」が二十世紀に残された医学の最大攻撃目標となった。WHOでも世界のがんの制御対策の一環として、国際がん情報センターならびにその協力機関の組織づくりのための会議を、昭和四十三年七月にジュネーブに招集した。それに亡くなられた久留勝前総長が日本の代表として招かれたが、健康の都合で私が代理で出席したのである。

当時、WHOでは胃がんのほかは肺が

ん（米国）、乳がん（フランス）、白血病（ソ連）、子宮がん（スウェーデン）、黒色腫（イタリア）をとりあげ、それぞれがこの中の国が情報センターに予定されていた。予算などの関係から、胃がんは肺がん、白血病とともに、昭和四十五年のジュネーブの会議まで発足が遅れたが、予定通りに胃がんの国際情報センターは日本の国立がんセンターに指名された。

国際情報センターには、協力が決まられて一つの組織を作って研究活動を続けるようになっていくが、これを国際協力センター（ICC ≡ International Collaborating Centre）とよんでいる。この時の会議で指名された協力センターは、英、仏、ソ連、チェコスロバキア、チリ、コロンビア、ナイジェリア、アラブ連合の八ヶ国であり、その後西独とハンガリーが追加され、それぞれの国の機関に代表が決められている。

われわれの情報センターの正式な名前には、「胃がんの診断法と治療法を評価するための国際情報センター」という長い

もので、これからもわかるように、このグループの業務は、胃がんの診断や治療に関する最新の情報を収集したり、お互いに交換して、胃がんの治療成績を世界的水準において向上させることである。しかも、高度の医学レベルの目的をもったもので、たんに行政レベルのものではない。

◇現在までの活動

国際胃がん情報センターがスタートしてから三年余、今までに進められた活動は大きく分けて次の三つである。

先づ第一は、胃がんに関係する情報の収集と交換であって、特に、胃がんの発生に関係のありそうな食習慣や環境などの疫学的情報、胃がんの早期診断や治療成績などの臨床的情報、制がん剤をどのように使うのが有効かというような胃がんの薬物療法の情報、血液や尿などを用いて胃がんの診断ができないかというような、全く新しい診断法の開発に関する情報など、世界中の新しい情報をで

きるだけ早く集めて、それを協力センターに流すことが定期的に行なわれている。最近ではコンピュータを使って、一層迅速に、より豊富な情報の収集、流布が可能になってきている。これらの情報をもとに、各国での研究活動が促進され、また実際の臨床に役立っている。

第二に、胃がんの診断法や治療法を評価するために、沢山ある胃がんの分類法のなかから、最も優れ、最も使い易いものを選んで、一定の基準化をはかるところ。それに基づいて、各国の胃がん患者の正確な登録と詳しい調査を行うシステムを完成すること。これらはコロンビアと日本が担当して作業をすすめ、その原案を今回のジュネーブの会議にかけて承認をえたのである。現在実際の登録作業が開始されたところであるが、その内容は医学的にかなり高度なものであって、将来広い範囲に利用されるべく、コンピュータによる集計や解析ができるように計画されている。

第三に、協力センターに指定された国

々の医師の実地研修で、昭和四十六年二月、七ヶ国からそれぞれ二名づつの医師を招き、一人はレントゲン診断、一人は内視鏡診断の研修を行なった。この目的は、登録調査のための基準がまちまちでは困るといふこともあるが、協力国のなかにはまだまだ胃がんの診断水準が低く、早く日本のレベルまでひきあげる必要があったことと、前回の会議で各国の代表が強く研修を要望したからである。

この研修は、日本の胃がん関係の学者が講義を分担され、また実習は、国立がんセンターのみでなく、癌研や東京都内の大学病院が積極的に引きうけてくれたもので、各国から集まった研修の医師たちの間では、極めて好評を博し、私としても非常に満足することができた。経費の面で具体的な計画はないが、第二回目の研修を希望する声が強い。

◇IRCの将来

さて、国立がんセンターがWHOから胃がんの国際情報センターに指名された

ことは、まことに光栄であり、着実に実績を挙げえてきたことは誇りとしてよからう。これからも、国際信義上、また世界の期待に添うために、その活動を広く活発にしていかねばなるまい。これはとりもおさず、日本人が胃がんの恐怖から解放されることである。

ところが、これだけの活動のために、国立がんセンターに特別の定員が配置されたり、特別の予算が当てられたわけではないので、厚生省のがん研究助成金の一部や、がん研究振興会の特別の配慮のもとに、国立がんセンターのスタッフが忙がしいなかで全力をあげ、さらに、日本中の胃がんの研究者たちが骨身を惜しまず協力してくれたお蔭で、私の大任がやっとなんて果されている状況である。

この先、がん制圧のための国際協力がますます強く要求されてくると、胃がんだけではなく、ほかのがんについても国際情報センターや国際協力センターの指名をうける可能性がある。日本のどのがんの学者も世界に通ずるレベルの高い研

究を続けているが、WHOとしては、この場合当然国立の施設をその対象としてくる。その理由は、すでに各国には国立のがん情報センターが存在して、そこが国際情報センターの指名をうけ、その国立の情報センターが引きうけるという考え方にもとづいているからである。

WHOから胃がん以外のがんの国際協力を依頼された場合には、わが国ではそれぞれの学会や研究会をバックに、すぐ研究者のグループが集結して態勢を整えてくれることは間違いない。しかし、どのがんであっても、情報収集とか患者登録という実務を伴ってくると、日本中の国立の施設の中には、受入れ能力を完備したものは一つも見当たらない。そこで、胃がんに限らず、悪性腫瘍全体に亘って、日本国内の情報活動を受けもつもの、すなわち、国立がん情報センター(NRC ≡ National Cancer Reference Centre) というようなものがあつたらよいのになあ。いや、これはなんとか発足させねばなるまい。

モンブランの純白の頂の上に、私の夢が次第に大きく膨らんでいった。

(国立がんセンター総長)

「追記」

WHOの国際情報センターの正式名称は、昭和四十九年五月十四日付でWHO-IRRCからWHO-C(Collaborating Centre)に変更された。

塚本憲甫先生は、胃がんのため、六月七日に国立がんセンターで亡くなられました。行年六十九歳。謹んで哀悼の意を表します。
(編集室)



鼎談



吉田富三先生を偲んで



出席者（敬称略）

石館 守三

日本薬剤師会長

黒川 利雄

財団法人癌研究会
付属病院名誉院長

中原 和郎

国立がんセンター研究所長

司会

国立がんセンター放射線診断部長

市川 平三郎



司会 今日お集りをお願いした先生方は、いづれも、がんの医学に偉大な業績を残された吉田先生と非常に関係の深かった方々ですので、貴重なお話をお聞かせいただけるものと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

佐々木研究所で

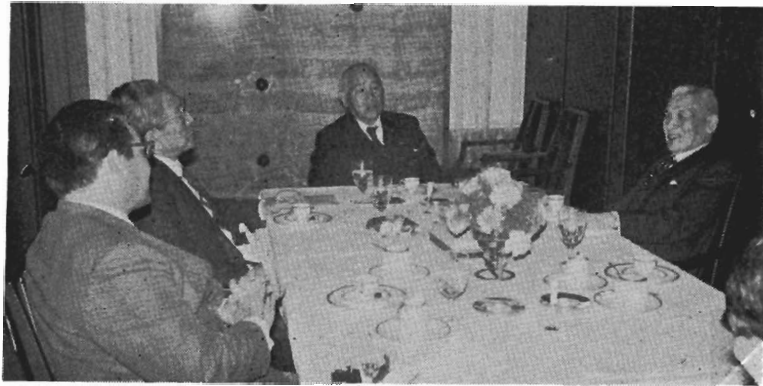
まった、その進路

中原 私は実は吉田君の古いことは全然知らないのです、聞き伝えしか。吉田君について一番驚くべきことだと思うのは、佐々木研究所に入ったことですね。それが千載一遇的なできごとなんです。というのは、あそこで生涯の進路がきまっちゃっているのです。しかも、それをずっとやっていったのが彼なんです。ちょうどその頃、吉田君が大学の無給の副手だったわけです。ところが、そのころに、間違っているかもしれないけれども、おとうさんがお亡くなりになっ

た。それでおこづかいがほしい、それについてはいつまでも無給副手じゃ困るからというので、どこかおこづかいがもらえるところはないかということで緒方先生に話したら、佐々木研究所というところに席があったわけです。ちょうどその前までいた和氣さんという人が、台北大学の教授になって、そのあとがちょうどあいていたものだからそこに入った。そこがあのアゾ色素肝がんの始まりになったんです。

司会 佐々木研究所というのは、がんの研究の歴史では相当意味のある存在だったわけですか。

中原 そのときはそうじゃない。佐々木研究所というのは、佐々木隆興先生が非常に裕福なお医者さんで、杏雲堂という大きな病院を持っておられて、それでその私財を投げ打って、自分の病院の中に研究所をつくられて自分でやっておられたのです。先生は生化学に興味があって、病理学なんかあまり興味がない。だから佐々木先生のがんの仕事というの



向かって左から、市川、石館の両先生、正面が黒川先生、その右ひだりむきは中原先生。

は、吉田君がやったということですが。それ以来、佐々木研究所はがんの研究所ということになったわけです。

司会 今日の名をなさしめた最初だったわけですね。

中原 がんの研究機関としての名をつかったというのはやはり吉田君の仕事ですね。

黒川 佐々木隆興さんという人は、京都大学の内科の教授だったのです。それで政吉という養父が、佐々木東洋、それから佐々木政吉、そして佐々木隆興となっているのです。東洋先生に子供がなかった。それで佐々木政吉という人を入れて、この人が東大の内科の教授です。それでその人にも子供がない。それで、東洋先生の甥である隆興先生が本所の佐々木家から入って、そのあとを継いだ。そして、ドイツに自費留学で八年か九年おられた。帰ってきて京都大学の内科の教授になった。京都大学に行っただけけれども、あまり内科、いわゆる内科学に興味がない。そのうちに杏雲堂の政吉先生が

亡くなったので帰って来ざるを得なくなった。京大の教授をやめて町医者になった。それで、佐々木先生という人は、本当に学問については、臨床に即した研究ということが頭から離れない人だったのです。

司会 いままで言う臨床研究ですね。

黒川 でも、化学者ですね。ドイツでも化学を勉強された。



ありし日の吉田富三先生

アミノアゾトルオール

の研究は、塞翁が馬^{*}

中原 ドイツではエミル・フィッシュャ

1の研究所におられた。だからたん白質の研究なんです、もともとは。日本に帰られてからも、微生物を使ってたん白質の分解をやらして、そしていろいろな新しい物質を見つけた先生ですよ。アントラニル酸というものを微生物でつくらし先生です。

司会 そのとき吉田先生は……。

中原 そのときは吉田君は多分大学に入ってもいなかった。ずっと前の時代です。

黒川 京都大学から東京に戻って来て臨床もやらなければならぬけれど、しかし研究が好きでしょうがない。だから、臨床研究室のようなものをつくってそれを佐々木研究所として……、いまは佐々木研究所付属杏雲堂だけれども、そのころはおそらく杏雲堂付属研究所だったのでしょう。そこで、だからドイツから来たアミノアゾトルオールを研究室に持って来て、これおもしろい薬だから君何かやってみないかと言われて、渡されて吉田君もそれをやったのですね。

吉田富三先生の略歴

明治三十六年福島県に生れる。昭和二年東大医学部卒、長崎医大教授、東北大学教授、東大教授、「吉田肉腫の病理学的研究」により日本学士院恩賜賞を受ける。東大医学部長を二回つとめる。昭和三十八年三月東大を停年退職、癌研究所長となる。この間、三十四年には文化勲章受賞、日本学術会議委員をはじめとして、各種の委員をつとめる。昭和四十八年四月死去、七十才。

*塞翁が馬

人生の幸不幸は予測できないものであるというたとえである。昔、中国の北境の塞（とりで）のちかくに住んでいた老翁が飼い馬に逃げられ、それによって禍福がさまざまに転じた、という故事による。

(編集部)

中原 それが本当の吉田君の一生の出発点だよ。ああいう出発点は全く千載一遇というか、しかもおとうさんがちょうど亡くなって云々という事と関連しているものだから、塞翁が馬みたいですね、本当に。

黒川 佐々木先生という人も偉い人であったのでしようけれども、これをやはりその考え方をほんとうに理解して勉強したという吉田君だってもちろん偉いからそれができたんで、ほかにたくさん人もいたのだから、そういう方でもないのですから、またそういう点でほんとうに運命的な出会いじゃないかという気がします。

石館 運命的というよりも、吉田さんの研究に対してやはり佐々木先生の影響は非常にあると思いますね。出会いというのはいずれでも出会うけれども、それを佐々木先生のいいところを自分に受け取めるというところに、一つの吉田君のいいところがある。非常に尊敬していた。また、佐々木先生という人が臨床家だっ

たけれども、非常に学究的な人であった。佐々木先生が京都大学をやめてこられて自分で研究所を建てられた、そして、シンポジウムをやった、あのころ。われわれもそれを聞きにいったものです。田村憲造先生とか、学問の好きな連中がグループで夜の時間、一月に一回くらい懇談会をやっていました。そのときもアミノアゾトルオールの話聞いたことがある。あの先生は学究的な一つの骨がある人だから、あの当時では、いわゆる世間に迎合しないで、こつこつとわが道を行くという性格の先生だった。そういうことがやはり吉田君に影響しているのではないか。

戦争中でも、忍耐よく肝がんの研究

司会 吉田さんが佐々木研究所に入られたのはお幾つくらいのときですか。

黒川 卒業して二年ぐらいです。二十七、八というときですね。

司会 どのぐらいの期間……。

黒川 長崎へ行くまで。初め助教で、それから外国から帰って教授になったのです。

石館 ドイツに行った時私と一緒に。

黒川 何年ですか。

石館 一九三六年、ちょうどヒットラーの時代で、それでベルリンのオリンピックがあった年です。赤崎君も一緒だった。長崎に赴任する前に……、長崎に赴任しちゃってから……。

黒川 長崎に内定して助教としてドイツに留学した、そして帰って来てすぐ教授になった。

司会 二年でしよう。

石館 そうです。

司会 佐々木研究所でやられた研究は、ずっとあとまで関連しているわけですね。

黒川 最後までです。

中原 腹水肝がんでいろいろな種類を

つくってその可移植系を何十種類かな、たいへんなものでしょう。

石館 いまはそうだけれども、その当時はアミノアゾトルオールというものを続けてやって、肝がんをつくらして、それが長崎で戦争中やはずうっと続けてやった。戦争中は、学者は大体戦時研究みたいなものに行った、研究費がないものだから。戦時研究にいはば研究費も特別扱にする。配給する。それから戦時研究員だと兵隊にも行かなくても済むというような恩典がある。そういうことにかかわらず、そういう戦時研究的なものをやらずに、いまの腹水肝がん、そして吉田肉腫というような単細胞のがんが出てきたということを終戦直前、戦争中に彼はつかまえた、それを後生大事に……。たいがいならあんな時代だと、そんなのん気な肝がんのおもしろいものが出たというようなことは問題にしない時代でしたよ。戦争中にはそんなのん気なことはしてられない。日本が存亡のときだからそんなのん気な研究をするなという時代

でした。それを自分で忍耐強く続けて、ほかのものにはあまり目を転じないでやったというところに、彼の一つの人となりのいいところがある。人のまねできない凡人でないところがそういうところにあると私は見ている。しかも、それが悲愴な考えでやったわけじゃない。それを



石 館 先 生

かれて他に目をくれないで、食べ物のない、米の配給したのをさいてネズミを養っているというところは、別に彼はそれを悲愴な考えでやったわけではなさそうなんだな。みんなはほめるけれども、それは当然好きだからやったというだけの話らしいのです。そういうのが彼らしいところなんです。

劇的でなく、自然に

生れた吉田肉腫

司会 世界的に有名になった吉田肉腫というのはそういう発祥なんです。何か、劇的にばつと見つかつたのではなく、自然にわいてきた。

自然とやるというところに、また彼のいいところがある。人のまねのできない吉田さんらしい態度があると思うのです。何もそれをいかにもあれがどんな結果になるなんというのを夢見ながらではなく、興味を持っておもしろいものだな、がん細胞というものは。という興味に引

石館 そうなんです。それを注目して、これはおもしろいという、いわゆる細胞に対する愛情がそうせしめたのであって、何もほかの他の大きな目的を持ってわけじゃない。やはりがんに対する愛情がそうせしめたというか……。

中原 すべての発展が自然的に出てくる。そのところが非常にいいんです。あの人の一生のおもしろいところなんです。

黒川 木下さんがバッテリーなんかをやったのはだいたいぶあとですか。

中原 すぐあとです。二年か三年かあとです。バッテリーのほうが肝がんと早くつくのです。がん元性が少し強いのです。だから、その後の研究者はバッテリーの方を多く使ったわけです。しかし吉田君の前の仕事あつての木下君のバッテリーという話なんです。

司会 長崎にまつわる話が出ました。が、長崎から仙台に行かれたのが昭和十八、九年でしょうか。

石館 十八年ぐらいでしょう。これもまた一つの奇蹟みたいなものだ。あそこにおつたらもう吉田君はいないことになる。二年違いにその代わりに行った身代わりの人がいるわけだよ。それは梅田君という同級生で、彼が仙台に引っ張られ

る代わりに着任して一年たってからどかんと原子爆弾にやられた。あれは同じ同級生ですよ。だから人の運命はわからぬね、こうなるよ。

中原 実際に運命というか何というか、ほんとうにおもしろいものだ。

黒川 そのころ東北大学病理の木村常也先生が停年で退官されて、ぼくはその後任の教授の選考委員だった。それで那須先生はもちろん病理の選考委員だった。内科、病院から二人、基礎から二人ということ。選考委員会ができて、それで私の親友で岩手医科大学の教授をしている、病理をやっている人間がいたので。当然私はそれを推すだろうと思つていたわけです。私は東北大学は何を求めるか、人間の病理学か、あるいは実験病理学か、人間の病理学には那須先生がいたんです。どうしても実験病理学となれば、ながめて見て吉田君をとらざるを得ないだろう。私はそう思った。それを主張して、そしたら当選した。

石館 運命だね。ぼくは、長崎のこと

を考えたら命はもうないと同じだろう。そこでひとつ死んだと思つて人生観をかえろよと言つたことがある。おれもそうつくづく考えているとか言つていた。

中原 吉田君の還暦のときの彼のごあいさつがありましたね。一少冊子として印刷になっているけれども。仙台へ行ってから、長崎から来た先生はまだほかにもいたそうですね。その中で彼が一番年が若いというので、現場のありさまを見て来いということになって見に行つた。ところが、病理教室で自分がいたならば講義しているだろうというその講義室が灰じんに帰っていて、後任教授の梅田君という人はパイプを吸っていたが、そのパイプが灰じんの中に残っていた。それからあと自分の前に住んでいたうちの近所をうろつてみると、うちのあとがあつてそこに現在住んでいた人たちが白骨になつて五、六体ころがっていたという。だから、もし自分があそこにならばあの状態であつたらうというのをまきに見て来たそうですね。そういう話をぼ

くは聞いた。

仙台での六年間の学究

黒川 だから、吉田君が吉田肉腫を非常に実験的に発展させたのは仙台でしたね。それで吉田君がよく言っておったのは、どうも長崎から来てみると、東北大学の卒業生はもっさりしておって気がきかないと言うのです。しかし一緒に仕事を

をしていると本当に良いと言うのです。ほんとうに克明にまじめにやってくれるのだ。自分も東北人ではあったけれども、そういうことをよく言っていました。

あそこでずいぶんたくさんの人々、佐藤春郎だとか、中村久也だとか、佐藤博、井坂英彦、小田嶋成和だとか、吉田学校と称して多くのお弟子さんが出た。

石館 仙台は環境があれだから、夜おそくまで、うちへ帰って晩飯食ってまた帰ってきて勉強するという一つの塾的な

教育ができた、あの時代は。

黒川 木村先生という人は、木曜日の晩に一日しかうちへ帰らない、木曜日と日曜日。あとはもうずっと朝から何か弁当をとって、だから、お弟子さんは油断できない、いつでもいるんだ、先生は。そういう人でしたよ。そういう伝統はありましたね。だから、いつがということはないんだな。

司会 長崎で発見された吉田肉腫というものを使われた研究が仙台で熟してきた。

黒川 そうですね。あそこで非常にたくさん研究をした。だから、吉田肉腫が治る薬は幾らでもある、たくさんこしらえましたね。何でも治るんだ、吉田肉腫は。だからがんの薬はすぐ発見できるかとぼくらは思ったぐらいです。教授会で学位論文を報告するでしょう、いいのがたくさんあるのです。

司会 仙台には何年おられましたか。
黒川 六年。
司会 石館先生との接触がはじまった

のはいつごろですか。

石館 それはまたこれも一つの偶然の出会いで、私と吉田さんとはベルリンでちょっとすれ違った程度で……、専門が違うからその程度であったわけです。帰って来て、吉田肉腫が仙台で発展されて、ちょうどいま思うと一九四八年ごろでしたかな、日本であなたと同じ名前の市川篤二君が南山堂から「ホルモンと化学療法」という小さな雑誌を——戦後はまだごたごたしていた時代でしたよ——出した。そこへ吉田君が、吉田肉腫を腹水で養うことができるし、これは試験管と同じに培養できる。これは化学療法という手段として非常に有効なものではないかと思うので、だれかやってもらえんかという吉田肉腫の説明と、そうしてその利用法をだれかやってくれ、化学療法に貢献するだろうという、そういう論文を初めて書いた。ぼくは偶然それを見たわけです。実はそのとき外国の雑誌を見ると、そもそものがんの化学療法をやり始めたのはアメリカで、戦争中も少しはや

られていたが、戦後窒素マスタードとか、葉酸拮抗剤とかやり出していった。日本はがんの化学療法なんかだれもやっていない。だれがやるかとなると、やっぱり誰か化学者・薬学者がいて協力しなければ進歩しない。それを見てすぐぼくは



黒川先生

手紙を出して、吉田先生、あなたの雑誌を見た、化学療法の研究のために非常にいいものができた——結核もとにかく薬で直らぬという時代がずいぶん長かったので——だから一たび試験管培養ができて初めて薬を提供することができて、結核はもはや薬で助けることができる時代になった。がんはもうそれ以上にむずか

しいとみんなあきらめておったが、あなたがこれを化学療法に利用できるのではないかとこのころに自分は非常に興味がある。もしそうであればネズミを使って実験できれば非常に進歩が早い。テストができるというので、ひとつあなたと協力していろいろな可能性がある化合物があるのだから、われわれ提供するからあなたそれでやってくれと、こういう申し込みをしたわけだ。これをラブレターと称しているわけです。

細胞に対する愛情

薬の研究をやるのは基礎学者としてやましいことだと考えていたらしい。それに、私という人間を良く知らないこともあってか、そのときに彼は、自分はやれないが、それを使うならいいでしょうというように非常に消極的だった。ぼくのころへの返事ではね。材料を提供す

る。これはあなたのところでひとつやたらどうかという話をして、最初は自分でやろうとは言わないんだ。ぼくは、そんなことではとてもだめだから、私自身はがんなんかあまり知らないんだから、それでぼくは仙台——あのころはリックサックを背負って歩く時代だった——へじぎじぎに行って、一晚吉田富三氏をくどいたわけだ。

あなたは病理学者でがんをやる、一体目的は何んだ、やっぱりがんを、とにかく不幸ながんを克服するためのがんの研究じゃないか。それならばあなた自身が協力しなければぼくのほうではとてできない。目的は同じじゃないか。あなたのいわゆる研究者として孤高を築きむのも結構だが、それはむしろぜいたくな、何というか道楽にすぎぬのじゃないかという話をしたら、彼もだんだんに——あとでわかるとおりその視野が狭い人じゃないから——理解を示したんです。やはりいつも彼はがん細胞に対して非常に愛情を持っておったと同時に、やはりがん

患者というものの悲劇に対する認識というものも強い。ぼくはそう言ったことに安心して、それじゃやろうということになって、ぼくは薬を彼のところへ送ってやり始めた。

もう一つは、そのころはがんに対する化学療法なんというものは、いわゆる山師か何か、野心のあるやつばかりやっていたから、そういう印象をみんなが持っていたのは無理ないのかもしらぬ。その前だってがんに効くなんてこともちよいちよ新聞雑誌などに書かれたこともあったわけだから……。当時、私もは戦後薬理研究会研究所というものを持っていて、研究をやる金がある。そこでやってきたものだから、ここでは少し大学ではなかなかできないようなことをやろうというので、それでこれをやるには研究所をつくらなければいけないというので桜井欽夫君を東京に——金沢にいて体を悪くして、東京へ来たい、来たいと言っていた——彼はこういうことには向いていてる男だから薬学ががんの化学療法に道を

開く、薬学のための一つのパイオニアになれという意味で桜井君を呼んで、そしてその下に二、三人をつけて始めた。

四十八才のときの

学者のラブレター

司会 先生がラブレターを書かれたのはお幾つぐらいのときでしたか。

石館 ちょうど一九五〇年だから、いまから二十四、五年前だな。ちょうど四十八歳だったかな。

司会 「四十八歳の抵抗」という小説がありましたね。そのラブレターをお受けになった吉田先生はそのときお幾つでしたか。

石館 ぼくよりも二つ若いから……、そういうわけで、それまでに吉田さんもちよいちよい薬を試験していたらしいのです。けれどもどうも何でもやったんで

はさっぱりだめだということなので、何を始めようかと相談しました。いまのところ吉田君のところの研究で非常におもしろいのはやはりマスタードの作用が最も合理的に染色体を変化させるといふことです。こういう薬はめったにない、いまままで実験したのは。自分でもいろいろやったにはやったんだな。けれどもこれは一番おもしろい、どうだこれをモデファイしてこれで毒性の少ない、安全なものをつくってもらえぬかという相談をしたんです。そしてらふしぎなんだな。マスタードを中心にして、それならばこれをオキサイドにすれば毒性はぐっと減るし、このオキサイドのOが体の中ではずれる可能性があるので大いに有望だといふので、最初につくった一発が当たったんだね。おかしいんだね。それ以上何ぼつくってもそれ以上のものができない。

中原 そんなもんだよ。

黒川 アミノ酸系のものについては……。

石館 それはあとだ。同じものもいろいろやったけれども……。

黒川 結局ナイトロミンなんだな。

石館 ナイトロミンか、それ以上のものにならない。それは多少似たようなものは出てきました。多少特徴のあるものはできますが……。案外早く、協力して一年たたないうちにできちゃった。それで動物実験をやって臨床実験をやって、黒川先生なんかに頼んで……。あのころは何もないときだから、マスタードのほかにないときだろう。それで、これを実験したら、ドイツのドルツクレイ教授がそれを実験してこれはすばらしいと、彼はばかにほめて、ドイツでも使わせろというので、ドイツのアスター社で出すことになった。きょうは吉田さんの話だから、彼はまだそのときは学者としてぼくはがん細胞病理をやるのを使命とする、化学療法などというのはやりたい者にやらせろという態度だったのです。

中原 邪道だぐらいにしか思っていない

かった。

石館 邪道だと思っていた。

がんの化学療法 の道をひらく

司会 ナイトロミンが出てきたころ、戦争中の毒ガスが戦後役に立ったという話がずいぶん出ていましたね。

黒川 マスタードを持って歩いていた人がみんな白血球減少症があるというので、白血球を減少させることが逆に治療の効果がある。私なんかもナイトロミンを使って、いまでも思い出すのは、若い男の子で前額に大きなおわんくらいの肉腫が出てきている。それをその局所に注射した。そして、それは雑誌に報告しましたが——全くなくなったのです。患者は結果的には死んだけれども、こんなにきくということが……、直接させたのですかね。

石館 そのころのナイトロミンはばかにきいたような気がする、おかしなものです。

黒川 それからもう一つ、私記憶に非常に残っているのは、セミノーム（性腺の癌の一種）の若い男がいて、腫瘍が外から触れるのです。それにナイトロミンを注射したところが、どんだんどんだん小さくなっていくんです。ところが、他の病気で死亡したので、解剖をした。そしてラゼミノール細胞が一つもない。みな繊維化していた、実際に効くと思っ……。

石館 効くと思っ使うからね。

黒川 ほんとうに解剖をしてみてもびっくりした。

司会 がんの化学療法のはしりみたいなものですね。

中原 まさにそうなんですな。

黒川 札幌のがん学界では吉田君がそれをやった。そして、緒方さんがディスカッションに立って、がんなんというものは化学療法で治るものじゃないと言

い出した。同じようなことは、たとえば熊谷先生で、結核を薬で直すなんていうのは結核を知らぬやつ言うことだと言ったんだから、実際。そしたら、ストレプトマイシンができて、東北医学会の例会でストレプトマイシンを中心にほくは例会を開いたことがある。熊谷先生が



中原先生

来て……。

石館 それと同じことを緒方先生などその後も主張していた。がん細胞というもの、自律性の生物でないので、化学療法の対象にはならないものだという考え方だ。

中原 化学療法の道を開いたというこ

とは確かに大きいね。

黒川 ゼミノームなんかそのほうがあまりきかない。

中原 そんなもんだよ。

石館 真剣になってほくは取り組むということが一つのポイントじゃないかと思うのです。

黒川 薬はたいいていそのときになるとよくないのですよ。

病理学者と薬学

者との出会い

中原 このごろみんな免疫抑制効果に非常に関心を持つちゃって、こわくて使えないという。だから、言うならば患者が死ぬほど薬をやればたいいていのがんは治るんじゃないかと思う。そこまで行くのがいやなものだから……。

黒川 こわいんです。

石館 徹底的に使えない。

黒川 および腰でやっているから、ここがきくという方向づけが非常に……。

黒川 ザルコマイシンというのはソ連でできたのですか。

石館 ソ連でできた。同じ系統だ。あれはアミノ酸のマスタードです……。

黒川 あなたのところですいませんアミノ酸をつくってたんじゃないか、アラニンとか。

石館 案外だめなんですよ。

黒川 ほくはそのうちの何だったか……、アルギニンにつけたものがあった、それが一番毒性が少なかったような気がする。

石館 あれはオキサイドでマスクしてないものだから、アミノ酸の場合はばつと消えてしまう、長続きしない。

司会 それから東京へおいでになったのでしょうか。

黒川 そのころは東京ではなかった。

石館 東京じゃなくて仙台でやった、最初のころは。

黒川 ぼくからもすぐ呼ばれてやった。
中原 だから吉田君の第二の出会いと
いうのは、石館君との出会いだろう…。

石館 病理の先生方はがんをつくる
ことばかり……、そのころはつくること
においては世界をリードしていた。

中原 しかし、これはつくってばかり
じゃだめだよ。利かないものがいくらあ
ったってしょうがないからね。

黒川 薬学者がやらなければいかぬ。
これは、できるできないは別にして薬学
者はしなければいけないということであ
って、だれか始めればみんなやるだろう
というのじゃ……。

中原 現実にはそうだった。

黒川 二十六年ぐらいから、仙台に六
年くらいいたかもしれない。

石館 ぼくの出会いは、昭和二十四年
だったと思います。

医学以外の分野 においても活躍

中原 それから東大の教授になったの
です。

黒川 がん研は佐々木先生の関係があ
るから、顧問的な立場でやっておりまし
た。

司会 そういう研究のほかに、吉田先
生は医学畑以外の広い分野でも活躍なさ
ったのですが、それはいつごろからです
か。

石館 東京へ来てからです。そこに一
つの問題があった。一体東京へ来るべき
かどうかという問題があった。佐々木隆
興先生がまだご健在で、学者になるんだ
ったら、東京へ来るなというわけです。
それはぼくも言いましたよ。けれども、
彼にはまた学者だけでない面がある。だ
から違うわけだ。つまり情熱家だった。

この情熱、単に東京に来て名を売るとい
う意味じゃなく、彼は単なる学者でおさ
まる男じゃないんで、哲学者でもあった
し、思想家でもあったし、芸術家でもあ
った。また、愛国心も強かった。彼はそ
ういう情熱もあったものだから、とても
東京へ出てやっぱり自分でやったほうが
いいという考えで……。

黒川 単なる一学究で終わりがたくな
いという考え方があった、濃厚に。

石館 それだけの彼は情熱を持って
た、社会に対して。

黒川 だから私なんかもずいぶん東北
大学を踏み台にして行ったとか……。た
とえば、大田正雄、木下柰太郎とか、
遠山郁三だとか、たくさん仙台から東
京へ来ましたよ。吉田君もそうです。吉
田お前もかというので——ぼくは母校に
呼ばれるのは最も名誉とするところなの
で、これは止めちゃいかぬ。留任運動だ
とか、学生がしようとしたけれども、吉
田君のためにそんなことしちやいかぬと
言った。

石館 ただし、東大に来て、病理学の教室のためにはあまりやらなかったということはいえるのじゃないか。

中原 そういう意味で大いに国家のために役に立ってくれた。

石館 病理学教室はあまり喜ばなかった。研究はとも東京の病理じゃできないといので、佐々木研究所を根拠にしてやったわけです。

黒川 東北大学からお弟子さんを、あそこへ連れてきたのですね。吉田君の本来的研究は、その佐々木研究所でやった。

司会 また元へ帰ってこられたわけですね。

中原 佐々木研究所に始まり、ずっと最後までいたということですね。

司会 国際的に活躍されたのは、そのころですか。

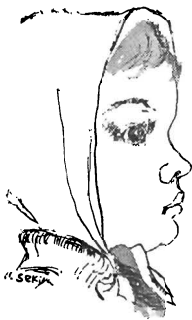
石館 もっとあとだ。

司会 がん研に行かれてからですか。

黒川 いや東大のころです。つまり、いろいろなシンポジウムとか、吉田肉腫と

いうものがユニバーサルの、インターナショナルの一つの道具になったわけですね。そのために、その話をみんな聞こうというので、どこかアメリカの……。

中原 アメリカのゴールドンコンフェンス。あそこへ初めて呼ばれたのです。そのとき以来、彼の英語の上達はすばらしいものでしたね。初めのときは何だかわからなかったと言います、向こうの人に言わせると。たとえばショパンの、こういう楽譜を演奏しているなと思えばそう聞こえる程度だったというのです。そういう表現をしていたやつがいた。それをあそこまで、とにかく英語の勉強をいぶんやっただけです。たいへんに勉強した。勉強しなければあんなにならない。やっぱり努力家だったね。



社会に対する情熱

司会 日本医師会長に推されたことがありましたが、あれはいつごろのことですか。

黒川 医師会長の話というのは、ぼくが来てからです。

司会 そのときに、非常に哲学的な名文をお書きになったですね、

中原 そうです。ごく最近のことですね。

石館 それも彼は愛国心というか、社会に対する情熱だね。都の公安委員にもなったり、ぼくは少し余計だと思わないです。

黒川 それは私が何かに書いたけれども、彼はウイルヒョーの細胞病理学という本、あれを

翻訳したのです。十何年かかって翻訳して出した、実験的細胞病理学……。ウ

イルヒョーというのは政治家だった、当時プロシアの国會議員だった。そして、生まれたのはビスマルクと近いところなんです。ビスマルクととにかく国会において相対して、ビスマルクの政策を批判できたのはウイルヒョーだけだった。そして、あまり小僧らしくやるものだから、ビスマルクに決闘を申し込まれている。そういうような人、ぼくはその翻訳をやっている間にウイルヒョーの影響を非常に受けたと思うのです。そして、最後にベッドに寝ていたときに、非常に細胞病理学というものと人間病理学というものに対して非常に考えたのです。だから、一つは直接はウイルヒョーにおそわっているのではないけれども、ウイルヒョーに学んだところが非常にあの人の人間形成に大きな影響を与えたのではないかと思う。

司会 いまのお話をもう少し詳しく教えてくださいませんか。

黒川 それはぼくもよくわからないけれども、細胞病理学をこしらえたのはウ

イルヒョーなんだけれども、それまでは人間病理学であるわけです。だから、それだけでいいというのかどうかというところもまた吉田君は考えていた。それから、人間の要素も考えなければほんとうの病理というものは意味ないじゃないかということ、最後にはそういうことになったわけです。

細胞の中に人生を見出す

司会 吉田先生はとにかく偉大な業績を残された。医学界の人は非常によく存じ上げておりますし、また、医学界以外にも特殊な人は、存じ上げているむきはたくさんおられると思いますけれども、どういふところが——吉田先生はもちろん偉大なことはわかるのですが——特に偉大だったと言えるのでしょうか。

黒川 文部省の国語審議会、戦後の日本語が非常に極端な変化を受けたとき

に、あれに対して吉田さんはやはり何でもかんでも昔のものをこわせばいいんだということに対して、非常に強い反感を持っておった。だから、自分では日本語に対する愛情を非常に強く持って、文章がうまいということも一つはそういう面が大いにあったのじゃないかと思いません。

石館 ぼくも彼とは何度も言ったように議論もしたし、人生論もたたかわした。先ほど言われたように、ウイルヒョーの翻訳からウイルヒョーの人となりというものに大きく影響を受けた。彼は一学徒としてでなかった。やはり、視野の広い人間として、あるいは社会に対する義務というようなものを強く考えて発言もしていた。だんだん彼がそういう情熱と能力を持っているので、いろいろのところに引っ張り出されるということにもなったわけです。そして、東大におればそういうことが多いものですから、だんだんそういうことで部長にも推されて、部長をやっても良識もあるし、大いに評

働かれておったでしょう。彼の人生、人となりをほくに言わせれば、がんの細胞病理をやりながら、そこに何とか生命に対する考え方をそこで鍛えていたのでしょう。また、愛情を持ってがんを探究していたということは、ひとつ学究的な方針として決して時流に流されないで、がんそのものを研究していた。ウィルヒョーの細胞病理というものに対して、それじゃいかぬ、やはりがん細胞はそうじゃない性格を持っている。ホスト細胞から色々の原因によって変異した一つの自律性を持った生物になっているというようなことをほくら大いによく聞かされた。ほくもがんのことは吉田君から大部分ならったわけです。芸術の中に人生があり、人生の中に芸術があるということばがあるが、ほくは、彼は細胞の生物学の中に自分の人生を見出し、また自分の人生観の中にがんの生理というものの研究がやはりそこに反映した。それが彼の人生観というものを高めたと思はう。そういう意味で、彼は常にもを哲

学的に考えることはドイツの学派から学んだでしょう。また一方において、その芸術からもその生命というものの事実とか生命の不可思議というようなものから、やはり人間社会というものに対して話しかけていたというところに、ほくは彼の深みがあったという気がしたのです。

中原 それがかも、こうこうこういうふうにいこうという初めから何も考えがあったわけではない。それが何となし、自然にこういうふうになってあいうふうになった、なるべくしてできあがるべくしてでき上がった吉田君の一生みたいな気がします。外から見ていると。

石館 だからそれは行きつ戻りつ、徹底した人生観を持つたわけじゃないんだ、何も。



市川先生

中原 自然にできてきちゃったんです。

石館 生まれながらの性格、宗教とか、信仰とか、というようなものを素直に受け入れるというのは、これは生まれながらの性質だと、そういうふうにならなければならぬ。彼は煩悶しながら行きつ戻りつ人生を味わい、人生を歩む、自分の頭で歩むという態度だったです。

錦城中学から一高へ

司会 天才性と努力と環境がびたっとうまくいったという点があったわけですね。その中で精魂を込めて努力したという根底には、何かあるのでしょうか。

中原 非常な努力をしているというところが根底ですね。それにいろんないいことがタイミングよくほんと……。

石館 努力というか、努力というのは努力しようと思っただけで努力しているのでは

く、努力せしめられたというのであって、つまりがんの生物学というものに対する非常な情熱と愛情がそうさせたのであって、故意にしたのではない。何か論文をつくろうとして故意にやったわけではないわけです。

司会 この一発の正念場とか、そういうようなところははないのですね。

石館 ないと思いますね。

黒川 私は、吉田君の人生を考えてみると、福島県白河のいなかですよ、故郷は。ぼくはそこへ吉田君のおっかさんの診察に行ったことがあるので知っています。酒屋の生まれで、素封家ではあったのでしようが……。あの辺には中学がない、郡山まで行かないと中学がない、白河に中学がない。それで、東京に親戚があるので東京の錦城中学へ行った。そのころの私立の二流校だった。そこで最初に一高に入るといふ、そういうおそらく錦城中学を出て、一高を受験するというような人は非常に少なかった時代じゃないですか。

中原 錦城中学あたりでは一高に入れなかった。

黒川 それをやっぱり入ったというところは、努力しなくちゃ……。ただ単に、頭がよかったからとかいふものじゃないと私は思う。あんな競争の最も激しい一高にとかく入ったのですから、そういうところから、すでに努力をするというところが身についていたのだと思うのです。

中原 わが道を行くというような態度がある。人のまねをしないというところがあるね。

黒川 だから両々相まってはいる。ただ運がよくてというようなものではない。

石館 自分で納得いくまで考え、自分で自分の道を歩いていくという態度を忘れたかった。

中原 逸話はあまりないですね。若いときに一緒にお酒を飲んで歩いたりするということはなかった。

司会 中原先生が一番接触されたのはいつごろですか。

中原 ぼくはやはり公的な立場での接触だからね。大体ずうっと。ずいぶん長いけれども。彼があの仕事を佐々木研究所でやったときはぼくはまだ知らなかった。

石館 ただ彼は、白河のいなかに、百姓家の子供として生まれたということも自分でもよく回顧して話したし、また、下情に通じておった。いわゆる、何とか育ちがいいほうじゃなかった、必ずしも。それがまた彼の人に対する恩情、人と協調する素材になっていたということとは言える。そのかわり。非常にみんなの言うことも理解したし、また何というか、下情によく通じている、そういう点で人を納得させる力もあった。



深かった芸術家との交流

司会 吉田先生の一生を顧みると、ほかのことをいろいろ考えないで、あることだけずっと考えているような期間がないと大成しないということですね。

石館 それは長崎時代、仙台時代がそうだった。東京へ来たたら自分で考えるなんて暇はないよ、押し流されるから。佐々木研究所にいて、佐々木さんのところで本当に研究室だけで生活した。長崎、仙台とわりあい研究のしやすい環境にあったこと、この十数年間が彼をして大きなポテンシャルエナジーを貯えさせたということは言える。東京へ来てからはだめだ、外交的になっちゃっていた。

中原 彼の仕事がはでになった。国際的交流、社会的のそれが多くなった。それは確かです。

石館 仙台までの業績が非常にものを

いう。

黒川 学問的には確かにそうだ。しかし、東京へ来てからは幅は広がった。仙台なんか狭いところだから、そんな広い活動なんかはできないところです、地味でもあるし。東京へ来てからはいろんな接触も……、芸術家とも、林武さんという人とは非常な親友だった。ここに来てからのつき合いで。つまり、ああいう

本当の意味での絵かきさん、芸術家、それがああいうふうに相許すというところには……。ああいう芸術家がこの人をして信用するということはよほどのことできやできないのじゃないかと思うのです。娘をくれたというくらいのところまで、非常に吉田君にほれ込んでいた。

司会 そういう所では、人がらがにじみ出るのですね。

黒川 そうです。それから永井竜男とか、そういう文士、小林秀雄とか、ああいう人とも非常に深い交わりでした。学問の面であれば、学士院賞を二度ももらったこともめったにないことです

ね。

石館 学士院賞をもらったり、文化勲章をもらったりしている人も多いけれども、そうでない彼のよさが彼の人間の中にあっただけです。

健康のために四股を踏む

中原 話は全然軌道を脱するのですけれども、私たった一べん彼と飲んだことがある。ずいぶん酔っぱらっちゃって、何を言っても、おいおいと声をかけても、返事しないくらいになって寝ている、三十分くらい。ひよっと起き上がる、全くいつ酔ってんだというようなかっこうで目がさめちゃう。彼は肝臓が非常によかったんだな。

石館 体力も強い男だったんだな。

黒川 しかし、努力もしていました。四股を踏むということが非常に体のためによい。四翻を踏むように運動する。そ

れから顔を洗うのにただ水で洗う。金だらいに水を入れてすわらないで立って、体を曲げて顔を洗う。そしてしかも何回もやる。だから、非常に血色がいいでしょう。ああいう努力も、ただ自分の資質に恵まれたというだけではない。それから運動少ないでしょう。あの人、車に乗っていつて研究室に入っているだけだから、やはり朝起きて、そういうことをやるといことが、七十歳まで健康で働けたということだったんじゃないかなと思ふのです。

石館 ふだんからいい体していましたよ。多少太り過ぎていたかもしれない。

黒川 たばこをのみ過ぎた。

中原 そのせいもあるかもしれない。

ぼくら並んですわっていると、ぼくが病人に見られちゃう。

黒川 いい顔色していましたよ、実際いつだって。

石館 青ざめた顔なんか見たことない。まあ過労も手伝ったね、晩年は。

黒川 つさ合いがいいからね。断わる

ことのできない男だから。

黒川 とにかく吉田君は、いまの実験病理などから始めて、ずっとほかに何をやって何とかというしゃべりはなかった。

中原 そういうものはあまり好きじゃなかった。

黒川 ぼくらの解剖を見ていると、たくさん若いの見ているからわかるんだ。結核だとか、がんだとかって、吉田君ぼくよりもわからないときがあったよ、実際。

治めざるをもつ

て、これを治む

司会 そういう非常に基礎的なことをやっておられながら、医療制度のことなんかでも。かなりつぼにはまったことをおっしゃるのはふしぎですね。

黒川 どこからか、そういうことをキヤッチする能力があるのです。本体を突

くという能力が非常にすぐれていると思ふのです。佐々木隆興さんという人は、決してこうやれとか、ああやれとか言わなかったそうです。これやってごらんよと言うだけで、やり方とか何とかについてはその人の能力にまかせるといようなやり方だった。そういう面で自分でやらなくちゃということ、事はそういうところでもう若いときからおそわったと思うのです。ドイツあたりでは、プロフエッサーが廻って来て、きょうはどこまでいった、こういうふうなやり方だね。そういうことは、あの人には教室だったことにはないですよ。

中原 彼自身したことはなかったね、全然。

司会 こまかいことは指示しない人のほうが大きくりっぱな仕事をする感じがありますね。

中原 治めざるをもってこれを治む。
司会 それではこの辺で……。どうもありがとうございました。（おわり）

点
描

築地本願寺界限

築地の国立がんセンターは、いま建物の大整備が急ピッチに進められている。地下を含めて十一階建のメイン・ビルが完成すると、文字どおり日本におけるがん医療のセンターとしての施設が整うことになる。それは近くに林立する商社などの高層ビルに比べて遜色のない景観を呈することが待たれるところである。

高くそびえるクレーン、忙しうに出入するコンクリート・ミキサー車などを右手にながめながら、市場橋のところへあるくと、魚河岸（うおがし）と反対側のはるかむこうに本願寺の塔が望まれる。京橋郵便局前で、晴見通を横ぎると、すぐに西本願寺である。地下鉄日比谷線の築地駅は、本願寺のまん前にその入口をかまえて



いて、〃本願寺前駅〃のような位置にある。魚河岸とならんで築地の代表的な名所である西本願寺は、元和三年（一六一七年）に日本橋に建立されたが、明暦三年（一六五七年）の振袖火事で焼失した。このため、その翌年いまの地に再建されたという経歴がある。それは江戸以来の歴史をしめす築地のシンボルである。エキゾチックな景観をたたえているインド風の大伽藍は、昭和九年に伊東忠太博士の設計になるもので、続

出する築地界限の高層ビルに対して、ユニークな名所になっていて、この境内には九条武子の歌碑がある。

おほいなるものちからにひかれゆく
わがあしあとのおぼつかなし
や

九条武子は、京都西本願寺に生まれた歌人であり、気品のある麗人としても又名高いことは周知のとおりである。大正十二年の大震災以後は仏教を通じて社会救済事業に献身し、四十一歳で病歿し

た。

もともと、この墓地には九条武子をはじめ樋口一葉、伊東巳代治、花井卓藏などの著名なひとたちの墓があった。けれども、大正十二年の関東大震災のとき、杉並区和泉町の本願寺和掘廟所へ移転されている。

玉砂利を敷きつめたその広い境内には、観光バスの出入りが多い。鳩の群れを追いながら団体参拝するひとたちの列がつづいていく。観光と信仰をかねたひとたちの方である。

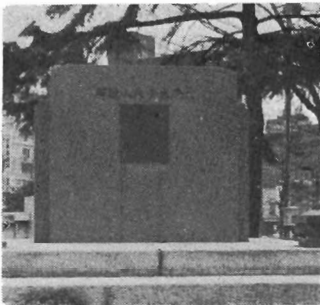
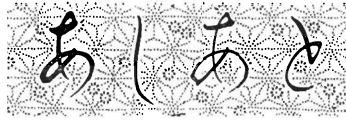


写真 右上、本願寺の本堂。
右九条武子夫人の歌碑。

本願寺で思いだすのは、その近くの築地小学校前であった築地小劇場である。大正十三年六月に開場して以来、新劇運動のメッカとしてインテリ層のファンを集めていたことはよく知られている。あのクッションのない客席椅子に腰かけ、尻の痛むのを忘れて、新協劇団や新築地劇団の演劇を見たことのあるひともし少なくないことだろう。けれども、懐しいかな戦災で焼失してしまっただまになつていく。(カメラと文 横山 茂)



ビ ル ロ ー ト
と
ブ ラ ー ム ス

「貴方が送ってくださいだった新しい歌曲集は、ぼくの心をこの上ない喜びで満しました。これは、確かに斬新な曲です。

ぼくはこの歌曲に新しい力、永遠の若さにあふれたヨハネスの新しい力を感じます」(ジョゼ・ブリュイール著、本田脩訳、ブラームス、白水社刊より)

これはビルロートがヨハネス・ブラームスに宛た手紙の一部である。ビルロートとは医学を志すものにとっては、医学生の頃からその名前を聞かされるたび

に、また口にするごとに戦慄を感ぜずにはいられない大外科医 Theodor Billroth のことである。ビルロートが史上第三回目の胃がん患者に対する胃切除に成功したのは一八八一年一月二十九日のことである。(第一回目は一八七九年四月 M. Pean 第二回目は一八八〇年十一月 Rydgyer による。) いづれも症例の選択に問題があり、手術後第一回目は五日目に、第二回目は十二時間で患者は死亡している。) ビルロートの胃切除を受けた患者は手術後約四ヶ月目に死亡しているが、その間、一時は自宅療養が許されるまでに寛解をえた時期もあった。ビルロートにとっては始めての胃切除例について、新潟大学医学部故堺哲郎教授は、「ビルロートが手掛けた患者と同様な進行状態にある症例に、今日の進んだ手術を施しても、良い成果をあげたかどうか、おそらく不可能であろう。早期再発は免れなかったものである」と述べられている。いづれにせよ、今から九十年前まだ麻酔学も、感染に対する処置も未

発達な当時において、一時的にもせよ退院可能なまでに患者を回復させることができたことは、これをもって胃切除成功の第一例と云ってよいであろう。ビルロートが胃切除に対するなみなみならぬ意欲を燃やしていたのは一八七三年頃からであった。犬の実験を積み重ね、胃がんで死亡した患者の剖検記録、生前の記録を調査して、胃がんでもとくに幽門付近の胃がんに対して手術の成功を確信したのは一八七七年来のことである。やがて、史上最初の成功例としてビルロートがその栄冠を担うことになる患者が彼の外来を訪れるまで、適応のある患者の出現を辛抱強く待っていたのである。決して大向うの喝采を意識した売名の行為の結果でもなければ僥倖でもなかった。その後ビルロート自身によって手術手技上の改良が加えられ、胃切除法は完成されるに到るが、今日なおビルロート法と呼ばれる胃切除の手技は基本的には少しも変わっていない。

このビルロートが始めてブラームスと

の知己をえたのは一八六五年十一月、ビルロートがチューリッヒ大学外科学教授をしていた時で、当時ビルロート三十六才、ブラームス三十二才であった。ビルロートの音楽的才能の素質はとくに母系



ハンス・ロット、ブラームス、ヴェルロー（ザラッゲンのヴェルロー）

から受け継がれているが、幼時、一緒に住んでいた父方の祖父の影響によって、音楽への強い関心は終生彼を音楽の虜にしていた。ブラームスとの生涯にわたる親交もビルロートの音楽に対する深い理解の上に結ばれたもので、すでに名を成していたブラームスと当代の外科医との

交際は、当時のサロンの雰囲気の中で交わされていたものでないことは *Briefwechsel im Briefwechsel mit Brahms* という二人の間に交された三百三十一通の書簡集によっても伺われる。冒頭の文章もその一文で、ブラームスがヴァイオリン・ソナタ第二番（作品一〇〇）といくつかの歌曲（調べのように、作品一〇五の一、その他）をビルロートに送った時の返事である。さらに続くビルロートの感想は深くブラームスを理解しているものによって始めて感得されるところで、後世の音楽評論家もビルロートの鋭い感性を高く評価している。ビルロートの示す暖い友情に対して、ブラームスも感謝の意をこめて作品五一「弦楽四重奏曲二曲」をビルロートに献呈しているが、第二番「短調」はブラームス苦心の作で、ビルロートの意見を入れてブラームスはいろいろ改作の手を加えたと云われている。二人のなかはビルロートが一八六七年ウィーン大学第二外科学教授としてウィーンに移り住むようになってさらに親密さを加えて

いった。一八七八年四月ブラームスに就いて始めてのイタリア旅行では、すでに経験のあるビルロートが案内役となり、その後一八八二年まで三回二人を交えた同行の人達とイタリアへ旅している。ビルロートはリュージュン島で、ブラームスはハンブルグでどちらも北独で生れ育った共通の想いが二人の友情をかきたたえたことは否定できないが、さらにブラームスの重厚でありながら淡色のな古典的傾向の強い作風はビルロートをすっかり魅了してしまっていた。ブラームス交響曲第一番の構想は、一八七六年夏に過ぎた。リュージュン島で練られている。二人のなかが余りに親密であったためにクララ（シューマン未亡人）さえブラームスは自分を疎遠にするようになったと誤解したこともあったと云われているほどである。しかし、ビルロート五十八才、ブラームス五十四才のころから二人とも年令を重ねるにつれて、精神的な柔軟さが失われていったためか、若い時であれば許し合える些細な誤解がもとになって二人

のなかには少しづつひびが入って来た。ビルロートが心疾患に罹り、ついにビルロートが死去する二十日前にはブラームスからの破局的な手紙を受けとるようになるのである。この間のいきさつについて、堺教授の文章をそのまま引用させて頂く。

「ビルロートは病をえてからも音楽に關するエッセイを書き続けていたが、その著作に必要ないろいろな民謡のリズムについての疑問をいちいちビルロートは一生懸命にブラームスに書簡で質問した。作曲家にとっては煩わしいことについてビルロートは「君の民謡のリズムについての質問にはホトホト飽きた。君の記憶の範囲内で十分だと思う。君自身の考えと観察によって判断すべきだ……」とツツパね、非常に皮肉な言葉をリズムに引例したのである。これが二人の間の最後の文通であった。」

看護に当たっていた夫人はいたく憤激し、ブラームスはビルロートの葬儀に参列することを許されなかったと云われ

る。ビルロートは一八九四年二月六日その偉大にして多彩な生涯を閉じた。六十才の誕生日を迎える二ヶ月前、明治二十七年である。ビルロートとブラームスの親交に触れているブラームスの伝記、解説書には、当時の絢爛としたウィーン音楽界・社交界を背景に育まれていった二人の友情とビルロートが外科の泰斗で

あり乍ら、音楽に対して深い造詣の持主であったことについて述べられているが、やがて訪れた破局についてまで書かれているものは見当らない。破綻の原因が何であったのか、ビルロート宛のブラームスの最後の手紙の文章や以下のことはいろいろなことを想像させる。ビルロートが死去して二ヶ月余り後になって、ブラームスはビルロートが作曲して残していた歌曲の刊行を未亡人に懇願している。未亡人からは曲を修正することなく、そのまま刊行する条件で作品が手渡された。ブラームスはビルロートの歌曲を公開するについては自分の判断で手を加えようとしたが、このことが未亡人の耳

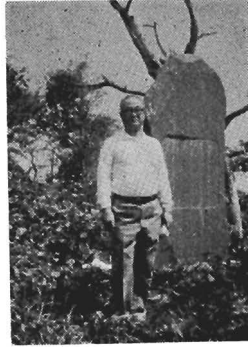
に入り、作品はビルロート家に戻されてしまった。その後、二年余り、未亡人の憤りも柔らぎ、ブラームスはビルロート一家をその別荘に訪れている。さらに一年を経た一八九七年ブラームスは肝がんのために六十四才でこの世を去った。葬られたのはビルロートの眠る同じウィーン中央墓地である。

（この一文を草するについては故堺教授の Theodor Bilroth の生涯を参考にさせて頂いた。文中のスケッチは桐朋学園大学講師本田脩氏のご好意により訳書「ブラームス」から転載させて頂いた。）

（仁井谷久暢記）



ロバート・コツホと鎌倉



鎌倉に住むようになって既に十五年経ったが、当地の名所旧跡を巡って親しむという心境になってきたのは、ごく最近のことである。春秋の天気の良い日曜日、家族うちつれての神社めぐり、お寺めぐりもピクニックがわりとなり愉快である。或日私は偶然鎌倉案内書の中に、コツホ記念碑の存在を発見し、驚きと共に自身の辻關さにあきれながら、ぜひ訪れる価値ありと決心して出かけたのは四月も末の休日である。

江の島・鎌倉観光線（通称、江の電）鎌倉駅から名物のガ

渡 辺 弘

タガタ電車に乗り、四つ目の駅、極楽寺にて下車、極楽寺の見学もそこに済ませ、極楽寺坂切通しを下って成就院に向った、成就院はコツホ記念碑のある霊仙山の北麓にあり、また目的地にも近いところにある寺である。

ここで極楽寺坂切通しの説明をしておきます。鎌倉は南方が相模湾に向い、後三方を後に囲まれた要害の地であったから、源頼朝が幕府を開く理由にもなった所です。しかし逆に交通の面では極めて不便なため、山を切り開いて道路をつく



る必要があつて作られたもので、七つの大きな切通しがあります。極楽寺坂切通しもその一つです。

新田義貞が鎌倉を攻めたとき、この地点をめぐるって血みどろな戦いがくりかえされ、遂には稲村ヶ崎に黄金作りの太刀を投げ、その干潟から鎌倉に攻め入ったという昔話も、この切通しの重要性を示しています。

さて、この極楽寺坂切通しの途中、右側の小高い丘の上はこの普明山法立寺成就院がある。開基は弘法大師、承久元年（一一一九）順徳天皇の建立といわれているがさだかでないらしい。ここは本尊の不動明王像をはじめとして、寺宝の豊富なことで有名である。小さな山門を通り抜け、まず本堂に向つて礼拝、さて、と境内を見廻したとき、ちょうど境内の庭を修理していた老庭師を見つけることができた。これ幸いと早速コッホ記念碑の場所を尋ねた。老庭師は親しげに、また得意げに、田舎訛の混じつた言葉で教えてくれた。

「ああ、コッパさんの石碑かね、この山の上の、あの枯れた松の木の根っこにあるだがね。こちらから直接登る山道があったのだが、去年の台風でその山道はつぶれてしまった。行くなら由比ヶ浜の方から登らないと行けねえだろうな」。

私は「ありがとうございます」と礼を述べながらも、コッホ博士遂にコッパ（木端微塵）にされてしまったかと苦笑を禁じ得なかつたが、医学とは全く無縁の老庭師が、近代医学の大先輩、ロバート・コッホ先生の石碑をよく憶えてい

てくれたものだと思心せざるを得なかつた。

それではと、成就院を辞して由比ヶ浜に向う。

再び極楽寺坂切通しのだらだら坂を下りて行くと由比ヶ浜海岸通りになる。ここの「坂の下バス停留所」の先でそのまっ正面に見える霊仙山へ延びる道を三百米ほど登って行くと、右側に草むらの中を登る急な細道が切り開かれていた。木の下枝や雑草にすがりつくようにして険しいこの細道を登

って、真上にある尾根の突端に立つと、東南に向つては由比ヶ浜はもちろん、逗子、葉山から三浦半島の先端まで、西に向つては江の島までの海を一望に見渡され、そのはるかかなたに連なる箱根、丹沢や富士を眺めることができた。

この突端の地点から、後方へ尾根づたいに頂上目ざして登ると、七十〜八十米の所で荒れた松林の中にコッホ記念碑が忘れられたように立っていた。碑は東（やや北寄り）に向い、黒味がかった一枚岩で作られていて、その裏面にはコッホ博士の弟子北里柴三郎博士はじめ十数人の有志の人達によつた大正元年に建立されたことが刻まれていた。

表面の上段には「Gedenkstein für Robert Koch, dessen Lieblings—Autenhatsort hier war.」（ロバート・コッホ記念碑、氏は好みてここに住めり）というドイツ文が五行に配列し、下段には永坂周の撰んだ次の文章が漢字で縦に八列に記されていた。

『明治四十二年七月、独国大医古弗先生、北里博士と偕に

鎌倉に遊び富嶽を望みて、之を快とす。博士、為めに榻を靈山山頂に設く、先生、昕夕、縦目して心甚だ之を喜ぶ。既にして西帰し、未だ幾ばくもなくして歿す。山の主村田君及び某某等相い謀りて、石を立て、以て遺躅を志さんとす。山下は即ち稻村崎、元弘の役に新田左中將の刀を投じたるの地たり、海濤、空に翻えり獄雪と輝映す。今は則ち海外偉人の留賞する所となる。此れ亦、以て伝う可き也、大正元年九月永坂周記并書』（富士川英郎「コッホ記念碑より」）

ここで鎌倉に遊んだコッホ博士の動静を記す資料が私にはないので、「細菌学雜誌臨時増刊・ローベルト・コッホ氏歡迎記念号」（明治四十一年八月）や、森鷗外の日記をもとに詳細に書かれた富士川英郎著、コッホ記念碑（素顔の鎌倉、大仏次郎編・実業之日本社、昭和四十六年）の中から鎌倉に關係する所だけを抜粋し、紹介を兼ねて報告したい。

明治四十一年（一九〇八）六月十二日

横浜到着——東京（帝國ホテル）に入る。（小川政修著、西洋医学史には「明治四十一年六月二十一日、六十五歳のコッホは夫人同伴、横浜に到着」とあるが、六月十二日が正しいと思われる。また石碑の明治四十二年は、四十一年の誤りといわれている。）

六月十六日

上野音楽学校で開催された歓迎会にて、約一時間にわたり、「眠り病について」と題して講演をおこなった。

六月二十一日

コッホ夫妻は初めて湘南に遊び、逗子から葉山海岸へ散歩し、北里柴三郎博士の別邸にて昼食をとり、午後は鎌倉に遊んだ。まず長谷の露坐の大仏を見物して、記念撮影をしたのち、「江の電」で片瀬（今の江の島駅）へ出て海岸を散歩したが、夫妻は「イタリヤにもかかる景色はあらじ」とその風光をしさに歎賞したという。それからコッホ夫妻は江の島を見物したのち片瀬の長与称吉氏の別邸で晩食の饗応をうけ、北里博士とともに帰京した。

七月三日

コッホ夫妻は日光見物および滞在の予定を天候不順のために変更して七月一日帰京し、あらためて鎌倉に赴いた。鎌倉は曾遊の地であるとともに、かねてその風光の美に惹かれていたからである。これ以後、約一ヶ月間、コッホ夫妻は主として鎌倉由比ヶ浜の海に面した海浜ホテル（現在は無い）に宿をとって滞在した。コッホ夫妻が北里博士とともにしばしば靈仙山の頂上に登って、その明媚な風光を嘆賞したのは、この海浜ホテルに一ヶ月ちかく逗留していた間のことであつた。

七月二十七日から以後約一ヶ月箱根、名古屋、伊勢、京都、奈良、大阪、神戸などをめぐり歩いた。

八月二十四日

横浜港より船にてアメリカに向った。

一九一〇年（明治四十三年）四月九日

劇烈なる狭心症発作に襲かれた。

一九一〇年五月二十七日

ドイツ、バーデン＝バーデンの静養先にて不起の客となつた。

コッホ博士の医学上の業績については、今更述べる必要はないと思う。
（「生命の科学」より転載）

◆参考文献◆

- ① かまくら子ども風土記（中） 鎌倉市教育研究所編 昭和四十二年
 - ② 鎌倉 加藤 薫 実業之日本社 東京 昭和四十六年版
 - ③ 鎌倉の散歩みち 富岡畦草 山と溪谷社 東京 昭和四十六年
 - ④ 素顔の鎌倉 大仏次郎編 実業之日本社 東京昭和四十六年——コッホ記念碑（富士川英郎）四十一頁
 - ⑤ 西洋医学史 小川政修 日新書院 東京 昭和十九年
 - ⑥ 医学の歴史 小川鼎三 中央公論社 東京 昭和三十九年
- （筆者は聖マリアンナ医科大学第一外科教授）

俳

句

米沢鉄男

浅蜷売落の匂い忍ばれて

看護婦に午後の余暇あり日脚伸ぶ

六十路来て人の和の春普請はじむ

鳩鳴いて騒音止まる初夏の暁

（国立病院医療センター）

新井春夫

夏木立ふと立入れば二人連れ

胸豊かなの娘みとれる盆踊り

院に立つ病人見上ぐ鯉のぼり

雨蛙しさに啼ける道急ぐ

（国立療養所多磨全生園）

故緒方知三郎先生

ご遺稿始末記



高 谷 治

☆はじめは一喝されたが

緒方先生がなくなられる約四・五ヶ月前に、私は緒方先生のご病床を訪れた。本誌に何か短文を頂くか、印象記をものにしようと思ったからである。それも一度は本誌の編集委員会にはかって賛成を得たことでもあった。かねてご病気とうかがっていたが、時にお元気な場合もあるとのうわさであった。果して当日は小康を得ておられて、ご気分も良いとのこ

と、一応来意は先生の秘書の方から通じてあった為に、すぐに病室に通された。

本誌「加仁」に何か一文を……というご依頼をあらためて述べ、テープレコードで先生のお話しを記録するおゆるしを得た。そこで、今まで刊行された「加仁」をご参考までにお見せしたところ、その数冊をパラパラと流し読みされているうち、先生のお顔付きが次第に不気嫌になり、はたとページをめくる手がとまった。私は何やら悪い予感に襲われたのであるが、色々と思いめぐらすひまもなく、大きな声が病室にひびきわたった。

きみ！ きみ！ この「加仁」というのはもうこんなにくさん出ておるのじゃないか！ しかも、がんに関する雑誌の様だ！ 今頃になって私に何か書けとは何事であるか！ 私はがんについては常に考えていた一番古い先輩なんだ！ 真ッ先に、第一巻第一号に私の話をのせようというならまだしも、今頃になって！ きみ、きみはそれを知らないわけはないだろう。だいたい今のがんの学者は……。

詳細はテープにしるされている。私は内容はとも角、あまりにも先生が強く興奮されたので、びっくりし、その非難の調子の激しさに圧倒され、これはとんでもないことになったわいと思った。しかし、何んとかいと口をみつけて丁寧にわび申し上げ、幾重にも編集委員のミスであることを平身低頭して、くりかえし、ガンガンひびきわたる先生の声の頭の上を通り過ぎるのを待った。

☆ベットでの口述を録音

気がついて時計をみると、約束の面会時間制限十五分はもうわずかだ。これは



この肖像画は、芸大教授・舟越保武画伯のデッサンになるもので、昭和四十八年、緒方先生九十才の正月の年賀状に印刷されたものである。その賀詞には「初春や人の情に生きのびて」という一句が掲げられている。

出直して来るか、あきらめた方が良いか、ちらりと隣室に助けを求めて目をやると、秘書の方がさっきまで誰かと話していたのだが、今はシーンとしてしまっている。一瞬、私は自分も医師であ

ることを思い出した。〃とも角良くわかりました！ 先生のおっしゃる通りに！ ところで、そんなに興奮されますといけません。ご病気にさわるといけませんから、今日はもうやめにして、出直してまいりますから〃と申し上げますと、ふと考え直された様子で、一瞬沈黙され、それから今迄とは打って変わった平靜な態度になられて、〃帰るには及ばない、云わしてくれろと云う機会は、ざらにある様で、そうないものだ。乞われれば、それはまたとない機会だから言わせてもらいたい。それに、私はもう死にかけてるかもしれない！ 私の遺言になるかもしれない。充分に聞きとってもらいたいし、言わしてもらいたい。いいかい、私の話がくどくて、辻つまがあわんで、頭が老化していると感したら、すぐにそういってくれ、私は頭だけは健全なつもりでいるんだが、それに今迄云ったことは全部取消すよ。これは前置きの前置きで、文章にはせんでくれ〃。

勿論、私は色々とハラハラしながら応

答申し上げていた。何よりもお身体にさわってはと思った。それから先生は一息入れて、ベットの上で姿勢までとのえられてから、あらたまった口調で口述を始められた。そして、それから一時間余にわたって口述は続いた。

漸く口述を終わって、お疲れの様子もなく、〃さっきは大声を出してすまなかったな。編集関係のみなさんによるし〃と、けろりとした口調でいわれたのに恐縮した。ほっとして病室を出たとき、一処に来て控えてくれた某氏がニヤリとした。先生やられていましたね！

一喝を食ってお気の毒とは思ったが、緒方先生も相変らずですね！ 昔からあんなくせがおりなんですよ、と私をなぐさめてくれた。それにしてもあのお元氣さではまだまだ長生きされますね！ とは別れしなに某氏のご感想であった。口述は全部テープにおさめたので、それを再生して文章にすれば良い。私はホッと大役が終った様な感じであった。と同時に何かすがすがしい感じがよみがえ

った。あの九十才の緒方先生が、ご病床にありながら極めて若々しく、且ついささかの闘志すら秘められて、云わせてくれるなら云う、とのすっきりした態度で、あくまでも論理的な自説を貫いて説いておられたことに感激した。学者の節をまげない生き方についての範を示されておる様な気がした。

☆あらためてご執筆

テープからの再生に時間がかかり、何よりも専門的で、かなり古いことも出て来るので、多くの先生をおわずらわせしその校正やら清書やらを経て、漸く出来上った原稿を再び先生の秘書におとどけし、このまま「加仁」にのせますということをお願いしたところ。しばらくしてあの原稿では不可！ あらためてあの原稿に基づき、新たに当方で原稿を作ってとどけるから、というお話しがあった。私はやれやれと思ったが、今度は口述に私が出向かなくても良いらしいと、ホッともした次第である。

しばらくして、お届け頂いた原稿は、大変立派なものであった。論説は整理されて四章に分かれ、その必要な部分には図がつけられていた。何よりもびっくりにしたのはその厚さである。大変な長さ！ 「加仁」の三冊分くらいある。

そして、医学の専門誌でない「加仁」にはもったいないような格調の高い医学論説であった。気の小さい私はそれだけで驚ろき、あわてた。「加仁」のせてもらえるか？ というご下問が秘書の方を通じて私に何度かあったが、その度に私は少々困ったと感じた。しかし、ともかく編集委員会にかけてとご返事した。漸く編集委員会が開かれて、文句なく掲載が決定した。ただ長いので、何回かに分ける他はないかもしれないということになっていた。そこでとりあえず掲載の決定したことを先生のお耳に入れなければと思ってお電話を秘書の方にしたところ、既に先生は死の床につかれておられたのである。ご病状危篤でご家族がつめかけておられるとのことであった。それ

からしばらくして先生のご訃報を聞いた。

九十才という高令で、今迄何度もご病氣はされたが、その都度立ち直られたが、やはり、お年には勝てなかったのであらうか。それにしても、約二十年前に、前立腺がんで手術不能といわれられ、睾丸を摘除され、女性ホルモンを注射をされておられた。そして、一向に人前をばかられずに女性ホルモンで乳房が大きくなったなどと云っておられたのに、近頃では先生についてはがんなご病状の様には云はれていなかったが、二十年後の今まで、がんがそのままであり得たのであろうか。この疑問は正に適していたのである。先生は前立腺がんと二十年間闘っておられたのである。解剖の所見を手に入れてみると、正にその様に思われる。しかし、がんをもっておられたも、常人には達し難い高令を維持されたわけである。これは正に奇跡的なことと思われる。しかし今思い起すと、あるとき御生前病床で示された一寸度外れた

興奮と闘志は、決して私に対してではなく、又「加仁」に対してでもなく、いさか先生を侵しかけていたがんそのものにむけられたものではなからうかと考えられる。私はむしろまざまざと先生の闘がんの闘志を偶然かいま見ることにしたのでないか。そして、あのがんに対するきびしい、特色ある物の見方は、それがそもそも先生のがんに対する闘いであったのであろう。自らの闘いを先生の病理学的論説にまで高められ、濃縮されたものであると、更に自らがんと闘うことになって二十年の長きに亘り超人的な闘がんの実蹟を示されたものに外ならないのではないかと感ずる次第である。

☆格調の高い論説の

ため専門誌へ

さて、その緒方先生の「加仁」に対する原稿は、今や或意味で先生のご遺言に変わったわけである。これは誠に残念なこととは云え、事実であるのでいたし方ない。このような貴重なものとなった

ご遺稿を「加仁」に分割して掲載することは、一度決定ずみのこととは云え、状況があまりにも変わったので如何なるものであろうかと「加仁」編集委員会で論議が起った。加仁にはもったいない高度に専門的な御論説である。これを聞き知られた千葉大学井出源四郎教授が、これは長年、先生が主催された唾液腺研究会の会誌に特別全文を掲載したいとお申し出であった。そこで、編集委員間でせつかくの長文のご原稿を少しづつ「加仁」に出すことよりも、その方が故人のご遺志にそうことであらうということとなり、ご遺稿は唾液腺研究会におゆずりした次第である。

そこでこの始末記となったわけである。最後になってしまったが、私にはご遺稿の内容はとも角、どうしてもあのとさ先生を示された闘がんの迫力あるお姿を目のあたり見て深く印象づけられたので、この事を書きとめておきたかったわけである。これは緒方先生の後輩に対する叱咤激励であったのであろう。また、

緒方先生の勝利の姿でもあったのではないかなど思いめぐらすと、やはり緒方先生の常人には考えられない大きさを感ぜざるを得ない。偉大なご先覚であられたことが、しみじみとしのばれるものである。

(国立がんセンター病院

生理検査室医長)

緒方知三郎先生略歴

明治十六年一月三十一日生れ、緒方洪庵の系統、明治四十年十二月、東京帝国大学医学部卒、東京大学病理学教授、東京大学名誉教授、東京医科大学名誉教授、日本医科大学老人病研究所長、昭和四十八年八月二十五日九十才にてご死去。



元一患者の手記

術後十年、元気にはたらく

二宮 宏



☆
幸先のよい松竹梅

古くから「病は気から」と言われている。私もそうだと思う。だが、言う人によって、どうも私の考えているものと幾分内容が違うように思う。私のはこうだ。

私が国立がんセンターにお世話になったのは昭和三十八年七月から十二月で、当時私の担当の先生は、上顎部切開の執刀をして下さったのが、斯界の権威、竹田千里先生。放射線照射の設計と指導を担当して頂いたのが、梅垣洋一郎先生。そして、療養中体調全体の観察と療養指導を受持たれたのが松浦鎮先生だった。三人の先生は勿論がん治療臨床医学の名医だが、それとは又別に、その方々の名前がよかった。頭文字だけを並べると、松・竹・梅になる。何と幸先の良いことだと思った。だがしかし、今はそんな迷

信めいたことを書くつもりはない。

私は先の第二次大戦中に召集されて、三回外地に行き、漢口周辺で熱帯性マラリアに罹り、高熱に犯されつつ野天の便所に冬の月を眺めたり、酷寒のシベリアで肺炎に倒れて、吹雪の中を馬糞にのせられて、発熱の手に雪の触感を味いながら一般市民の病院に緊急入院したりして、病気でも何度か死地を脱して来た。その度に、次第に人間そう簡単に死ぬものではないと言った暗示めいた自信を持つようになって居た。

☆ 進んで闘う意欲

私が入院がんと診断された時、誰れもそのことを教えてはくれなかったが、私は会社から厚生省か労働省に提出する、統計用の労働者負傷疾病月報なるものに通ず義務を持っていたので、勿論自分の病が月報の十三番「悪性新生物」だと言うことを知っていた。が、それでも、そのために極度のショックを受けることはなかった。やはりそんなことで俺は死ぬことはないと言った自信みたいなものがあつたからだと思つて居る。そして事実、手術後もう十年、再発なしに元気に働いている。

がんの様な病気には、最初のショックがしばしば最終的に致命的な打撃を与えることがあるのではなからうか。この病気は必ず治ると思うこと、自信を持つことは大切なことだと思つた。そして又、冒頭に書いたような些細なことも案外に、患者の気持を和らげ、不条理な自信

が生れる機縁にもなるものであろう。しかし気持だけではがんはなおらない。患者自身の素直な気持と努力が大切と思う。

発病当初私は会社の診療所長から、「一寸心配なんで、入院した方がいい。病院は東大病院か慈恵病院か、名前の点であなたはこだわるか知れないが、築地のでんセンター病院がいいと思いますが、どうしますか」

と言われた時、私は一瞬ためらつたが、むしろ懇願するつもりで、「がんセンターの名が出ました、その必要があり、それがいいと言うのでしたら、私はそうします」と答えた。

後になって、所長はあの時私が迷わずに、専門病院に進んで入院したことは大きなプラスになった筈だと言つて呉れた。

まだ当時は一般に患者の意識が低く、往々そんな病名をつけられることを恐れ、そんな名前に関係のない場所を選ん

で、各所を転々としている間に病勢が進んでいる例が多かつた。早期治療を必要とする場合、徒らに時間を経過することは危険である。病気を治すためには、積極的、病と闘う姿勢をとるための決断と勇気が極めて必要なものだと後で気がついた。

☆ ザイルにすぎる気持で

次に大切なことは、信頼の心だと思ふ。

小さな一例を挙げれば、
「こんなに薬を呉れるが、俺の病気には薬なんか効かないんだ。こんな気休めの薬なんかはのまないさ」

などと、知つたかぶつて居る人も居た。又医師の指示にそむいて、一寸生意気な気分ひたつたり、無理に療養に不都合な行動をして、社会的重要な人物ぶつたりすることは之も亦よくないことだと思つた。病院と医師を信頼して、その指導を忠実に守らなければ、治療効果は半

減するに違いない。

更に大切なことは、どんなに苦しくとも、がんばることだ。斗病という言葉がある位だから、やはり患者は自分自身で努力をする必要がある。病気だから苦しいこと、つらいことが山程もあるに違いない。私は斗病は根比べだと思ふ。断崖の突端にザイル一本にすがって、救援を待つ姿が難病と闘う姿だろうと思つた。諦めてはいけない。腕が痺れ、掌の皮がむけ、気が遠くなつても、「最早」とか「どうにでもなれ」と思つたら敗けだ。ザイルを離れた途端に、救援の手が届いても後の祭りなんだ。最後の最後まで闘う、それが斗病だと思ふ。

☆ できあがった斗病観

人は親切なもので、病人の所へ来てはいろいろと新知識や治療法を教えてくれる。大体は、生兵法であつたり、聞きかぢりのことが多い。あれこれその都度迷つていては、どれもが中途半端になつて

しまつて好結果は生れない。逆にマイナスになることも多いだろう。まして、薬をもつかむ思ひで、荒唐無稽な言葉に耳を籍すようなことはしないことだと思つている。

近代医学を信頼し、その上に立つて始めて「病は気から」治るものだと信じている。

私は自分の斗病生活がこんなに計画的に、理論的に進んで全快したとは思つていない。私の努力に勝るセンターの設備や、前掲の諸先生の知識、技術、更には幸運と言うようなものが重つて今日があるものと思つている。後になって、それらの日々を思い出す毎に、次第に私の斗病観が出来上つてきた。今では患者自身の認識も進み、こんなことはいまさらの繰り言になつていて呉ればよいと思ひながらこの稿を終りたい。

(株式会社高島屋取締役)

二宮 宏氏

昭和八年早大法学部卒、株式会社高島屋へ入社、三十六年理事、高島屋ストア代表取締役を経て、四十七年高島屋取締役となつて現在に至る。六十四才。

俳句

中村時雄

赤旗を

振る看護婦でいて優し

(国立高知病院)

作品介绍

(9)

「ありがとうとさん」
死とたたかう愛の対話

原田雄二郎・和子著

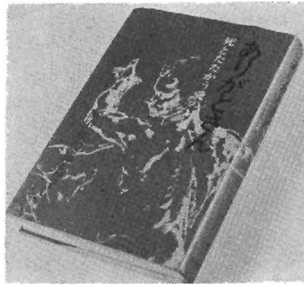
結腸部位がんと診断されてから、肝臓転移、そして、閉塞性黄疸という重なる病魔にさいな

た感謝のことばである。

内容は次の五章にわかれている。

- 1 三病棟二二七号室
- 2 楽し、わが家に
- 3 ひとり病いと
- 4 試練の日日
- 5 信仰と希望と愛と

和子さんは、その五カ月の闘病中に日記を書いていた。その中からの抜萃したのがこの内容である。平凡な、しかも神に愛された妻と、いつも現世の問題に追われていた夫との、ありふれた闘病の記録である。けれども、その中に、病魔とたたかひの中で二人は神の恵みに感謝しつづけるという信仰に生きる精神が一貫してみなぎっている。



左記のキヤッチ・フレージにあるようにこの書は、病気を発見してから死に至るまでの五カ月間の夫婦の日記である。

愛する者にとって死とは何か。
ガンで倒れた妻と妻を看とる夫と。
神との対話の中でしずかに燃える
祈りと希望の炎。
永遠の時を今に結晶させた
ある夫婦の五カ月の闘病日記。

まされながら夫婦してこれと闘った記録である。敬虔なクリスチャンである二人は、主たる神、イエス・キリストの恵みを感じながらんとたたかったのである。和子さんに死に至るまで、明るく希望と信仰と愛にみちた美しい闘病の生活をつづけた。十六年間の短い夫婦の生活がこの五カ月に結集されたように二人は手を取りあって全力を傾注したのであった。著者は、四十六年七月に夫婦の闘病日記を自費出版して、世話になったとひとたちや、親しい方がたへ感謝の気もちで届けた。それを読んだひとたちの反響は大きいものであった。そして、それに若干の書き加えをしたのがこの書である。「ありがとうとさん」という書名は、病いの床にあって和子さんがたびたび口に

信州の野尻湖は二人にとって第二のふるさとである。胸郭成形手術後の転地療養の地を野尻湖畔にもとめていた雄二郎氏と、やはりそこで社会福祉学園で教職にあった和子さんとは、この地でむすばれたのである。和子さんは、はちきれんばかりのエネルギーを発散して教職にはげみ、信仰と愛と献身によって雄二郎氏の健康回復に大きな力となったのであった。和子さんは死の間ぎわまで野尻をなつかしみ、元気になったら二人して野尻へ行くことをたのしみに行っていたのである。一時退院して小康を得たとき、二人は車で野尻湖へ行こうとも考えたが、ついに実現しなかった。この記録の中には、東京での病院と家庭の生活のほか、雄二郎氏の勤務地であった山口県の防府、そして、野尻のことが多く出てくる。とくに野尻湖畔のたのしい生活の回想は美しいものである。四十七年の夏、雄二郎氏は二人の息子さんとその野尻湖を訪ねてきているほどである。

「あとがき」の中で、著者は次のよう



左から、大介君、雄二郎氏、健助君。

に述べている。

「死」という最終関門を、愛する妻を通して、まのあたりに感ぜよという神のみこころに対して、あるいはうらみ、のろい、あるいは深く折って、私なりに出来るかぎりの姿勢で直面したものの、はたして半歩でも神に近づくことができたかどうか、いまは、ただ忸怩の思いである。

見よ わたしは戸の外に立ってただれでも わたしの声を聞いて戸をあけるなら
わたしは彼のところへ入って
彼と共に食事をし 彼もわたしと共に食事をする

ヨハネの黙示録三章二〇節

私は、私の戸を早く開けなければいけないと思う。開けて、主を迎え入れることのできるのはいつであるうか。ご一読下さる皆様の上に、主の恵みが、ゆたかにありますように。

作家の三浦綾子さんは、本書について「虚飾のない夫婦の日記」という見出しで、次のように述べている。

「死と太陽は見つめることができない」といった人がある。しかし、ここには、がんという現代医学の限界を超えた病苦と闘う妻を励まし、慰めつつ、真剣に死を見つづけた一人の人間がいる。それを虚飾のない夫婦の（後には夫の）日記を

通し読む者に迫る。しかも、この絶望的な中に希望がある。それは、キリストへの信仰によって、永生が確立されているからであろう。死を前に深く愛し合い、真剣に生きる夫婦の姿は文句なく胸を打つ。

B 6 版、二二四ページ、47・8・15、発行、定価六百円、発行所、〒一〇一、千代田区神田小川町二一八、筑摩書房。

著者からのお便り

昨夏、私は二人の息子と三人で、なつかしい野尻湖へ行ってきました。今年もまた出かける計画をしています。長男の健助は、日大経済学部一年に在学、次男の大介は、全寮制の都立秋川高校二年生です。二人とも水泳が得意です。私も、中、高、大と学生生活中は水泳部で活躍しました。和子も、YMCAの水泳部の教師をしていました。つまり、水泳一家というわけなのです。いままでは、世田谷の野沢にある社宅に住んでいましたが、生前に和子と一緒にさがしあてて買

っておいた横浜の磯子の土地に、この春マイホームを建てて引越しました。和子が昇天してから、この八月ではやくも四年を迎えますが、神のお恵みで、父子三人ささやかながら平和な生活をしていきます。

昭和四十九年六月
〒二三五、横浜市磯子区磯子
字間坂一〇九三―一一八

原 田 雄 二 郎

原田雄二郎氏

大正十年生れ。昭和十八年東京大学農学部農芸化学科卒。農学博士。現在、協和醸酵工業株式会社技術部長。

原田和子さん

大正十三年生れ。昭和二十七年東京女子大学哲学科卒。結婚後は、家事のかたわら東京YMCA学院のアドバイザー、保母などをつとめる。昭和四十五年八月死去。

(横山 茂記)

短 歌

武 本 照 子

四十度の熱に喘ぎて臥す少女の
細きかいなにわれは注射す

鏡餅のひび少しづつ深くなり
今日小寒にさむき雪降る

(科学技術庁放射線医学
総合研究所病院部)

中 村 時 雄

残照の林道を来て茸を焼く
匂いしづかな門辺を過ぐる
残照の河口は広し対岸の
溶接光の青く昏れゆく

(国立高知病院)



相川 エミ

元癌研究会 附属病院
放射線科看護婦長

彼女は戦前、戦

中、戦後を通じ、
日本におけるがん
治療の歴史ととも
に生きた異色の一
人と云えよう。

昭和九年、癌研
究会附属康楽病院
が発足してまもなく、

放射線科看護婦として勤務し、昭和
四十七年七月勇退されるまで、一貫した
博愛精神と卓越した放射線管理能力をも
って、困難をきわめたがん患者の治療、
看護に情勢を燃やしつづけてきたのであ
る。



現在、がん専門医として第一線で活躍
中の医師達は、すべて彼女を讃え、母に
対する如く親しみをこめて語る。

「私たちは、彼女によりがん治療の何
であるかを植えつけられ、がん放射線治
療医としての実際について手をとって教
育してもらった」と。その当時の放射線
治療の主流をなすものはラジウムであっ

た。小さなラジウ
ム針一本一本には
独特な番号がうっ
てあり、毎日、数
百本のラジウム針
を確認し、その保
管管理に少しの狂
もなかったとい
う。少しの狂があ

っても、業務の円滑などとうてい望めえ
ないのである。また、放射線障碍という
面からみても、相当危険な業務であり、
何人でも易々と出来る仕事ではない。一
日、外来患者三百名、入院患者百名の治
療が塚本部長（現、国立がんセンター総

長）を陣頭に深更に及ぶまで、整然と行
われたのは、彼女の人間性と云おう
か、自己をかえりみない影の力がもたら
した結果といわざるをえない。上に掲げ
た表彰状がこれを如実に物語っている。

一方、患者に対するきめ細い看護技術
を紹介しなければならぬ。例えば、治
療中の食道がん患者の食餌法の指導であ
る。現在は内視鏡によって容易に食道粘
膜の障碍の状態を観察することが可能
で、その障碍の程度に応じて適切な食餌
を与えることが出来る。現在において
も、その当時の彼女の方法が受けつがれ
ていることは、その方法がいかに適切で
あったかを物語るものであろう。さら
に、患者の不安感に対する精神面の看護
などは、彼女の努力と工夫、患者をいか



第一二二号

表彰状

相川エミ殿

あなたは多年にわたり博愛精神を
發揮し困難かつ地道な職務に
献身されました
よってその功勞を表彰し永く
榮譽を称えます

昭和四十七年十一月十日

財団法人日本顕彰会

会長 松川良



にして助けるかという熱意、それに豊富な経験、科学的視野とが調和されはじめた出来上ったものであり、一種の名人芸線治療、看護の実際面の指導者である。換言すれば、塚本先生を医師としての放射線治療学の開拓者にとえれば、彼女はその看護学のパイオニアと云えるであらう。

「多年にわたるがん治療、看護の経験から後輩に一言」という筆者の問に對し、「私は勉強が嫌いでしたね……。塚本先生を中心とし、患者第一主義をモットーとして頑張ってきただけです。医療従事者として最も大切なことは、心のかよった治療、看護の遂行の一言につきますね」。年令よりも若くみえる柔らかな横顔に、四十年間、がん患者に接したある悲しみが想い出されたのであろうか、一瞬、敵しさが横切った。ちらほら白髪が目につくとはいえ、大柄で大変健康的とおみうけした。第一線を退かれても、今後の人生を、後輩の育成とがんの啓蒙に捧げられんことを希望するのは筆者一人だけではあるまい。

彼女の四十年間にわたるがん患者の治療、看護と放射線管理という偉大な足跡は、何時までも大勢の後輩の心に生きつづけ、益々発展してゆくものと信じて止まない。

(北岡久三記)

短

歌

山本 根子

受付のわが表情を

うむごとく

耳遠き老婆またたきもせず

ストレスの多き世なりき

処方みな

精神安定剤はいりいたり

(国立佐渡療所

「歌と評論」同人)

がんセンター
めぐり

(8)

千葉県
がんセンター

建設のあゆみ

千葉県がんセンター建設の第一歩は、今を去る十六年前、昭和三十二年二月、千葉県がん対策審議会が発足した時点にさかのぼる。具体的には、昭和四十二年九月に同審議会の答申案が出されてからのことである。この答申案にもとづき、昭和四十四年四月に千葉県がんセンター建設準備委員会が設置され、同時に県衛生部予防課内にがんセンター建設担当が設けられた。同年九月衛生部にはがんセンター建設室が設置され、センターの設計



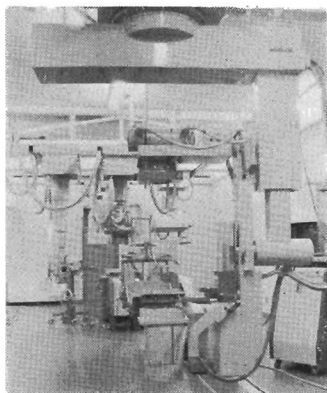
正面、前庭に設けられた駐車場から本館を眺めたもの、
向って左端が病棟、中央が管理棟、右端が外来棟。

に着手した。建設工事は四十六年一月より開始され、四十七年七月に本館が竣工し、同年十一月開設の運びに至ったもので、開設までに三年余にわたる準備期間を要した。初代センター長には福岡誠吾博士（前、愛知県がんセンター外科第二部長）が就任された。

建築と設備の概要

千葉県がんセンターは、千葉市街中心から約七キロ、千葉市から九十九里浜に通ずる大網街道に沿い、元国立千葉療養所の跡地に位置している。敷地面積は約四万四千平方メートルで、周囲には国立千葉東病院、社会保険病院、千葉県精神衛生センター、衛生専門学院などがあり、更に目下千葉県厚生年金老人休暇センターが建設されつつある。附近は首都圏の都市内としては緑の濃い広大な地域で、健康の森とも呼称されている。建物は、地上六階、地下一階、延べ面積一九、二二九㎡の本館と共に、敷地内には

看護婦宿舎、医師公舎等が設置されている。本館は管理棟を中心として、外来棟・放射線診断部、臨床検査部、研究部、動物実験飼育等を含むブロック、放射線治療部、中央手術室、エネルギー、電気室等を含むブロック・更に病棟と五つの大きなブロック棟にわかれ、センター正面は南面して、その前庭には百台以上を収容し得る駐車場が設けられている。このような本館内の構造のうち、特徴的な事項を挙げると、総床面積一九、



二方向同時連続撮影装置
(血管造影用) : (シーメンス)

二二九 m^2 のなかに一、六五一 m^2 (八・五%)の研究部門がふくまれ、また、二百床の病棟が研究部門を除いた一七、五八〇 m^2 に占める割合は二三・九%と非常に小さくなっている。このことは病棟に比較して中央診療部門が大きくなっていることを示すもので、放射線部門等は全体の一五・四%を占めて、一般病院のそれ(一・九 \times 六・〇%)にくらべ倍以上になっている。

設備整備の現況。がんの診断、治療において最も重要な部門である放射線部門では、何れも最新の設備が為されている。診断部門では、消化管用万能ジャイロX線TV装置、心血管造影用X線装置(二方向、シーメンス製)を始めとして、内視鏡用X線TV装置に至る十二台のX線撮影装置を有している。

また、治療部門では廻転式テレコバルト装置、シミュレーター、横断々層装置、4 Mev 医療用リニアック装置、18 Mev 医療用ベータートロン装置、あるいはラルストロン等が整備されている。殊

にベータートロンは中央手術部門と直結可能な処に設置され、術中の開創照射が容易に施行出来るように計画されている。手術部門では、四つの手術室を備え、各室の手術台は何れも術中撮影が可能である。また、患者を台上にのせたまま、開創照射の為移動出来るように設計されている。

更に、手術室に近接して最新の設備を有する十二床のICUが設けられている。研究部門では電子顕微鏡、組織培養設備のほか、SPFシステムの実験動物飼育室、大小動物の実験室、手術室、あるいはRI動物実験室等、最新の基礎的研究の設備がなされている。

基本構想とその特色

がんセンターは、その目的からして規模、設備内容等が格段にすぐれたものではないなければならないことは論を待たないが、一方、地方自治体の運営するセンターである以上、地域医療、殊に地域が

対策の中核的役割を果たす責任もあろうと考える。従って、千葉県がんセンターとしては次のような基本的構想が取り入れられ、その実現に向けて組織造りが行われている。すなわち、

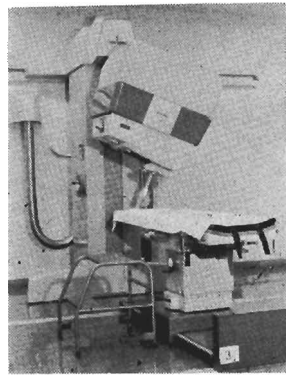
- (1) 診療ならびに、がんの基礎的研究。
- (2) がん登録による実態調査。
- (3) 集検（第二次の精密検診を担当）。
- (4) 技術者の研修
- (5) 広報活動

等である。斯る基本構想の為の組織として、センター内には疫学部門、調査広報部門が設置され、殊に企画調査の仕事は将来構想の問題、がん患者の登録、追跡調査、情報資料の収集等、極めて広範囲にわたることが予想される。

このような考えから、当初より導入設置された電算機 (Eaom230-25) の total System への移行が急がれている。

次に組織を示す。センター長のもとに事務、診療、研究の三部門がある。診療部門は一般診療部、放射線診断部、放射線治療部、臨床検査部、手術部、看護部

130kVp 医療用ベータートロン
(シーメンス)



にわかれ、研究部門には病理、生化学、化学療法、疫学の四部がおかれている。電算関係および企画調査関係は事務部門を離なれ、センター長直属の部門として方向付けがなされている。

診療体系

千葉県がんセンターにおける診療体系の特徴としては、従来の内科、外科等の診療区分を廃して、臓器別診療の体系を採ったことである。

すなわち、呼吸器科、消化器科、血液化学療法科、頭頸科、脳神経科、婦人科、泌尿器科、整形外科に分けられている。この診療区分は外来、病棟にても同様となっている。一方において患者の病歴は外来、入院を問わず、一人一カルテ制を採用し、各診療科を患者が移動するに当たっても常に同一カルテを使用し、総合診療の実が挙げられるように企画されている。がんの診断に重要な内視鏡部門は、放射線診断部門に併設され、センター内の診療と共に、集検の第二次検診（精密検診）をも担当している。手術室、IUCは麻酔科の管理のもとで運営され、主治医及び麻酔医の緊密な連携のもとに術後患者の治療が実施されている。看護部は九つの看護単位で構成され、一般病棟では四十二床を一看護単位としている。

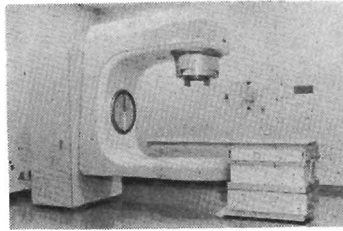
研究部門

研究部門として現在設置されているも

のは、病理、生化学、化学療法、及び疫学の部である。当センターの研究部門は基礎的研究はもちろんのこと、

臨床部門と有機的連繫をもって臨床部門を支える役割を担うことを原則としている。

具体的には病理部門は、研究所病理と、臨床病理 (Hospital Pathology) の両機能を持つように組織されている。従って、病理部門は病理学者五名のスタッフにて、基礎的研究と共に、多数の臨床組織検査、剖検例の処理にあたり、研究部門では最も多忙な領域となっている。化学療法部門は、主として化学療法剤の開発を目的としているが、これと同時に診療部門に属する血液化学療法科も、この化学療法部門の施設を利用して



4 May 医療
用リニアック

化学療法に関する基礎的研究を行っている。このように、診療部門に属するスタッフでも、臨床に直結する基礎的研究は、斯る研究部門の施設を利用することによって活発に遂行されており、実験動物実験室、飼育室、あるいは組織培養室等には、常時診療部に属するスタッフも入り込み、研究活動を行っている。センター病院において、研究部門と、診療部門とがややともすると疎遠となり、為に基礎的研究面における交流に欠けるうらみのあることが良く伝えられるが、当センターにては上述の如きシステムを更に発展させることにより、このような心配は乗り越えられるであろうと期待している。

疫学部門は、既に導入され病歴管理、データ管理等に動きつつある Faom230-25型電算機を駆使して、がんの実態調査をはじめとする幅広い疫学的研究を行う予定である。

開設以来のあゆみ

昭和四十七年十一月開設以来のあゆみをふりかえてみると、診療患者数は外来、入院共に着実な歩みをもって増加しつつある。ただ、外来診療は紹介、予約制を採用しているため、一般病院の如く急激な増加傾向は示していない。

然しながら、外来診療患者の大多数は入院治療を要する患者が多く、がんセンターの機構と、特性が普及するに伴ってこの傾向は増加している。当センターでも、看護婦不足の影響は深刻であり、六階の病棟は開設時は四階まで、昭和四十八年五月になって五階を開設し、目下最後の六階開棟の為の努力をつくしている現状である。従って、センター開設当初の一般病棟 (ICU、RI病床を除く) 数は八四床、五階開棟の時点でも一二六床に過ぎない。この為、手術者もやや伸び悩み、開設以来十ヶ月を経過した現在 (以下は、68ページ3段へつづく)

**質問
コーナー**

(8)

本号では、がんの中でも難しい病気とされている白血病について専門医である坂野輝夫先生から、六つの問いについて解答していただきます。読者のみなさん、あらゆるがんにについての質問をお寄せ下さい。

白血病 6問 6答

問 白血病はどんな病気
で、最近増えて来たのでし
ょうか。(杉並区、主婦、60才)

答 白血病は造血組織の
で、骨髄や血液の中の白血病細
胞の性質、此をつくる組織の相違
によって骨髄性、リンパ性、単球

☆本号の解答者

☆国立センター病院

内科 医師

坂野輝夫 先生



性等のたくさんさんの型に分けられま
すが、実際には殆んどが急性及び
慢性の骨髄性、リンパ性白血病で
す。大人では、急性及び慢性の骨
髄性白血病、小人では、急性のリ
ンパ性及び骨髄性白血病が多く、
日本人には慢性リンパ性白血病が
少なく、外国の十分の一位です。
原因については他のがん同様明ら
かではありませんが、放射線取扱
者、原爆被爆者に多い事はよく知

られています。又、最近は原因ウ
イルスが遺伝子の中にひそんで、
親から子に伝えられ、放射能や化
学物質等の刺戟で活動し、発病す
るのではないかと言う可能性も注
目されています。さらに、原爆等
とは関係なく我国でも白血病が集
中発生した地域がいくつか知られ
ており、色々な面からの原因究明
がなされつつあります。次に死亡
数を見ますと、明治四十三年には
二五七名でしたが、昭和四十五年
には、三五四名と、十四倍にも
増え、中でも治療がむづかしい高
令者が増加してきています。

問 どんな症状ではじま
るのでしょうか。(北九
州市、公務員40才)

答 白血病の種類によつて
ずいぶん違います。急性白血病は、
発病が急激で高熱、出血(鼻、歯
齦、性器、皮下等)が多く、又貧
血による顔面蒼白、身体のだる
さ、どろろき、息切れ等です。そ
他、リンパ性ではリンパ腺のは
れ、単球性では膿疽性扁桃腺炎等

も認められます。次に大人に多い
慢性骨髄性白血病は、本人が気が
つかないで、健康診断や他の病気
の診察の時に白血球が多かった
り、お腹のしこり(主として脾臓
のはれ)で見られる場合も少な
くありません。又、我国では非常
に少ない慢性リンパ性白血病で
は肺門リンパ節がはれて肺ガンとさ
れたり、又腸のリンパ組織がはれ
て直腸がん、腸閉塞等として手術
される事も稀でなく注意が必要で
す。又余り多くはありませんが、
急性白血病で白血球数が正常かむ
しろ少なく、その上白血病細胞が
血液の中に現われていない事があ
り、骨髄穿刺と言う特殊な検査を
しなければ診断できない場合もあ
ります。次に注意しなければならない
ない事は、慢性骨髄性白血病の治
療経過中に、突然、高熱、出血、
貧血、腰痛等が現われ、血液検査
でも急性白血病と同じ状態になる
事があり、これを急性転化と言
い、治療がむづかしくなります。
ですから、急性転化の防止を早期
に診断、治療するため特に自覚症

状がなくても、定期的な診察、検査が是非必要な訳です。

問 白血病の予防、予知
はできないのでしょうか。

(青森市、農業、55才)

答 非常に困難です。然し、ダウン症候群(蒙古症)という染色体異常による小児の先天性異常は近視結婚に多く、更に白血病的の発生が多い事が知られています。又前がん状態と同様前白血病的状態として再生不良性貧血、悪性貧血、真性多血症などの中から白血病的進展する事もあります。更に女性の場合、自分でも妊娠と氣付いていない初期に、定期検診や他の病気の検査又は治療等のためレントゲン検査をうけることがあり、妊娠初期の胎児への照射は避けなければなりません。

問 白血病の治療にはどうしたらよろしいのでしょうか。

(町田市、会社員、49才)

答 先ず急性白血病について見ますと、輸血等のみで抗白血病的病剤がなかった時期には殆んどが

一年以内に死亡しました。一九四八年にメソトレキセートと言う薬の効果が報告されて以来、新抗白血病的剤が次々と開発され、特に小児の急性リンパ性白血病では有効な薬剤を組合せた併用療法で九〇%以上が一度は臨床的に治った状態(完全寛解)になり、又五〇%生存期間(半数の人が生存し得る期間として治療の一つの目安とします)も以前の五カ月から最近では三十三カ月にもなりました。これに反して、大人の急性骨髄性白血病的では成績が悪く、五〇%生存期間は最も優れている私達の併用療法でも十一カ月で満足すべき状態ではありません。一方、慢性骨髄性白血病的では五〇%生存期間は三年前後です。白血病的治療にはいくつかの基本条件があります。先

ず早期発見、早期治療ですが、刻一刻と状態が変化する白血病的治療においては、医師の知識、経験に加え、熱意がより望まれるわけです。又、治療を続けながら経過中好転、悪化を繰返えし、悪化のたびに治療がむづかしくなります

から、最初の適切な治療こそがキーポイントです。入院治療を原則とします急性白血病的とは異なり、外来治療の多い慢性白血病的でも何よりも医師患者の深い信頼関係の上に立った根気が大切です。即ち専門医による早期診断、治療をうけ、再発、悪化又は急性転化防止のため定期的な診察、検査の上、根気よく適切な治療をつづける事が大切です。

問 白血病的の治療には輸血が大切なのでしょうか。

(松本市、団体役員、56才)

答 白血病的の死因の大部分は出血と肺炎、敗血症等の感染症です。特に、出血に対しては新鮮血はもとより、これより分離して用います血小板輸血が有効で、白血病的治療の大きな支えになっています。慢性的血液不足状態に対しては、私達一人一人の輸血の重要性に対する啓蒙、理解、協力がなければ解決されません。私が以前から提唱しています一生一度献血を、病人の見舞品に献血をの運動に是非参加していただきたいと思

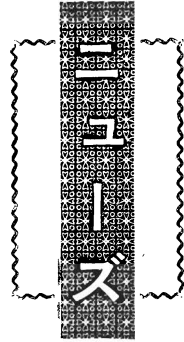
います。

問 急性白血病的は治るのでしょうか。(千代田区、教員、51才)

答 昭和三十二年以前には全く治った人はおりませんが、その後漸次増え、現在では全国で二年以上二八六名、五年以上五十名の長期生存者がおり、年々増加して来ています。白血病的と言えども、不治の病でなくなりつつあると、私達一同努力しているところです。

質問のしおり

- ▽がんに関するあらゆる質問を、文書でお寄せ下さい。字数は八百字以内です。
- ▽かならず、住所、氏名、職業、年令を記入して下さい。
- ▽あて先、東京都中央区築地五の一、国立がんセンター「加仁」編集事務局。



☆
四十九年度予算にお
けるがん対策費増額

四十九年度予算は、総需要抑制と物価安定を旗印に緊縮予算が組まれているにもかかわらず、社会保障関係の充実に図るため厚生省予算は、大幅な増加をみせている。

がん対策費としては八十九億円を計上、都道府県がん診療施設整備、国立がんセンター等の整備を推進するほか、がん研究助成金は十億円（前年度は七億五千万円）に増額された。



左から、塚本理事，尾形医長，令嬢，夫人，中村氏

☆
大―物産の中村社長
振興会にご寄附

大―物産株式会社取締役社長の中村二郎氏は、十年前国立がんセンター病院第三病棟医長、尾形利郎先生の執刀によ

り胃癌の手術を受けられ、今日なお第一線で活躍出来ることに感謝して、一千万円をがん研究振興会に寄附された。写真は、中村社長から、寄附金の贈呈を受ける塚本理事。

☆
七十三年度ノーベル
生理・医学賞

七三年度ノーベル賞の生理・医学部門受賞者はオーストリアのカール・フォン・フリッツシュ、コンラット・ロレンツの両博士と、オランダのニコラス・ティンバーゲン博士の三人の動物行動学者（習性学者）である。「個体的、社会的行動様式の組織と誘発に関する諸発見」に対して贈られたが、医学・生理学の主流からはいささか遠い行動学にノーベル賞が与えられたのは新しい傾向で、その意義は大きいとされる。三博士は長年にわたるミツバチ、鳥、魚などを中心に、その行動習性と、それらの行動が開発される仕組みを研究してきた。心理学や精神医

学にも影響を与え、人間行動の理解にも大きく貢献した。

☆ 診療報酬改定二月から実施

厚生省は診療報酬改定の二月一日実施を告示した。引き上げ幅は一九・〇％である。

この引き上げは四十七年二月以来満二年ぶりであり、この二年間の物価、人件費の上昇が著しいことからみて、この引き上げによっても、病院の経営の経済的苦しさは依然続くものとする考えも強い。

☆ 高額療養費制度の新設

健康保険の家族の自己負担が月三万円をこえる場合は、超えた分は保険から支払われる高額療養費制度は、多くの健康保険で昨年から実施されており、日雇労働者健康保険でも四十九年十月から実施される予定である。

家族ががん罹患した場合、高額療養費を要する場合が多く、扶養者には精神的な重圧とともに経済的にも大きな負担であった。高額療養費制度の新設は、家族療養費の給付率の引き上げ、高令者の療養費の減免とともに、がんと闘病する患者さんとその家族にとって大きな福音である。

☆ 国立四医大の創設

四十九年度には、浜松医科大学、宮崎医科大学、滋賀医科大学が創設されるほか、筑波大学の医学専門学群がスタートする。また新潟大、信州大の両大学に医療技術短期大学部が創設される。

同大学の医学科は、それぞれ百人の学生が募集される。

なほ、開校のおくれている旭川医大、山形、愛媛両大医学部は、昨秋発足し、学生も募集された。

☆ また延びた平均寿命

厚生省の調査によると、昭和四十七年の平均寿命は男で七〇・四九才、女で七五・九二才となり、四十六年に比し、男では〇・三二才、女では〇・三四才伸びて、今や長寿国のトップグループの一つに数えられるようになった。

また、脳卒中による死亡がなくなれば、男三・二三才、女三・三才、がんによる死亡がなくなれば、男二・四七才、女二・二三才、また、心臓病による死亡がなくなれば、男一・四二才、女一・五四才も寿命が延びる計算になり、脳卒中、がん、心臓病の三大成人病による死亡がなくなれば、男七・一二才、女七・〇七才も長生きできるわけである。

これを世界的に見ると、最長寿命国は、男七一・八五年、女七六・五四年の値を示すのがスウェーデンである。

☆
第六回がん研究
助成金の贈呈
☆

昭和四十九年三月二十九日、経団連会館において、本会の第六回がん研究助成金を、花村常任理事から、別表の方がたに贈呈した。

ウィルソー基金による果実馬場正三氏に贈呈することにした。その研究者名、研究課題等は別表のとおり。



写真 上、花村常任理事から贈呈を受ける研究者代表
下、同贈呈式場の全景。



☆
がん研究振興会
役員異動
☆

松浦十四郎氏の厚生本省転出に伴い、後任として国立がんセンター運営部長の林 弘氏が理事に就任した。

なお、長年本会の理事としてご尽力下された市川忍、土川元夫の両氏が此の度ご逝去されたので、ここに謹んで哀悼の意を表します。

市川 忍 丸紅株式会社 会長 昭和

四十八年十一月二日死去。

土川元夫 名古屋商工会議所 会頭 昭和

和四十九年一月二十七日死去。



上の写真は振興会の理事会のシーン

★
ご寄付受領

□財団法人毎日新聞東京社会事業団を
通じて匿名による二百五十万円の寄附が
当振興会に寄せられた。

□パキウムコンクリート株式会社取
締役社長の仁谷正雄氏より、ご令室靖子
様が肝臓がんでご逝去された事を悼み、
特殊な研究に使用されるよう二百万円を
当振興会に寄附された。

□東洋紡績株式会社会長の伊藤恭一氏
より、ご尊父様忠兵衛殿が、胃がんでご
逝去された事を悼み、百万円を当振興会
に寄附された。

★
がん研究振興会

理事会ひらかる

財団法人がん研究振興会では、昭和四
十八年度第二回理事会を、三月二十九日
に経団連会館で開催し、左記の議件につ
いて審議した。

- ①役員変更について
 - ②寄附行為の変更について
 - ③昭和四十八年度事業経過報告
 - ④昭和四十八年度収支予算執行見込
 - ⑤昭和四十九年度事業計画並びに収支
予算案
 - ⑥募金の状況
- 当日の出席者は、次の方々である。
常任理事 花村仁八郎
理事 石川七郎、川上六馬、小林節太郎
武田長兵衛、塚本憲甫、林 弘

第六回がん研究助成金贈呈表

研究者	所属施設	研究費 (万円)	研 究 課 題
牛 島 有	名古屋大学附属病院検査部 副部長	一〇〇	唾液線腫瘍の病理組織学的研究
内 田 清二郎	九大医学部癌研・併任教授	一〇〇	グロス白血病のウイルス学的研究
北 村 元 仕	虎の門病院生化学科 部長	一〇〇	悪性腫瘍とくに肺がんにおけるアミラーゼアイソエンザイムの 動態
熊 岡 爽 一	国立がんセンター研究所 内分泌部長	一〇〇	日英両国正常婦人のホルモン環境の比較

佐藤茂秋	国立がんセンター研究所 発癌抑制研究室 室長	一〇〇	癌細胞におけるDNA複製、特に短鎖中間体DNAに関する研究
菅野晴夫	財・癌研究会癌研究所長	一〇〇	癌細胞にみられる分化の研究
杉山憲義	財・癌研究会附属病院 内科医員	一〇〇	Limitis Plastica の早期診断について
竹田美文	大阪大学微生物病研究所 助教授	一〇〇	ポリアミン代謝と癌細胞増殖
多田満彦	愛知がんセンター研究所 生化学部部長	一〇〇	発癌物質・4・ニトロキノリン・1・オキシドの核酸修飾機構
塚越茂	財・癌研究会癌化学療法 センター基礎研究部部長	一〇〇	実験的リンパ節転移の化学療法
鳥海純	東京慈恵医科大学第三分院 中央検査部長・助教授	一〇〇	カドミウム発癌性に関する基礎的研究
中田陽造	大阪大学医学部癌研究施設 講師	一〇〇	細胞培養系における発癌機構
馬場正三	慶応義塾大学医学部外科学 教室 講師	一〇〇	大腸癌発生母地としてのポリープ及びポリポージスに関する 血清酵素組織化学的研究

ウイルソン基金とは

ゼロックス・コーポレーションの故
・C・ウイルソン会長の遺志により、同

夫人より当会理事・小林節太郎氏を通じて、昭和四七年四月一八日当会に一、五
〇〇万円の寄附があったので、これを記念するためウイルソン基金と命名し、こ
れより生じる果実を有意義なる研究者に
助成するものである。



四十七年つづき

三鷹市 下村 治
 東京都世田谷区 石田 薫
 川崎市 山口 純一
 東京都中央区 匿名
 品川区 田中 敏子
 新宿区 山本 明
 国分寺市 石野 幸子
 東京都中野区 中田 静江
 渋谷区 長沢 楨子
 杉並区 河合啓之助
 港区 Dorothy Wallich
 新宿区 後藤 正弘

当協会に寄付をいただいた方が
 たの芳名をご披露いたします。
 本号では、四十七年のつづきと
 四十八年の一部を掲載いたしま
 した。芳名の敬称は省略させて
 いただきます。

財団法人がん研究振興会

江戸川区 中嶋治一郎
 保谷市 盛田 明郎
 三鷹市 中川 充
 東京都世田谷区 有山 英雄
 板橋区 岸 克之
 世田谷区 安田 典次
 藤沢市 坂岸かね子
 東京都板橋区 堀口たけ子
 品川区 宮本 かず
 静岡県駿東郡 富岡 典雄
 東京都目黒区 青山 肇
 世田谷区 畑中 伸一
 武蔵野市 大野 瑛子
 東京都世田谷区 丸尾 慎

秋田県湯沢市 藤原 房子
 東京都台東区 飯田 修
 府中市 小笠原和子
 横浜市 中村 博
 東京都大田区 大橋 薫
 渋谷区 今野 房
 港区 佐藤 英子
 名古屋市 ジョン・シールズ
 東京都練馬区 池田 亮男
 世田谷区 GUAM96910 東海林ミツ子
 AGANA KENNETH T. JONES
 吹田市 大原 尚道
 埼玉県新座市 深牧 正臣
 東京都杉並区 横田地悌次郎
 三鷹市 鈴木 徳子
 名古屋市 ジョン・シールズ
 東大阪市 橋本 博
 東京都板橋区 鮫島 富子
 世田谷区 田川 貞子
 大阪府池田市 羽野 キン
 東京都渋谷区 芥川 情己
 北海道室蘭市 沖野 ウタ
 東京都世田谷区 権田 久子

神奈川 高座郡	菊地 毅
千葉 流山市	万代 富朗
東京 大田区	今村 とし
〃 渋谷区	内藤 正次
〃	匿名
〃 練馬区	森 やゑ子
〃 大田区	匿名
〃	匿名
千葉 船橋市	東社会福祉事務所
名 古屋市	日仏香料株式会社
東京 港区	ジョン・シールズ
東京 都港区	速水 昭正
横浜市	東 政子
東京 新宿区	石川 達郎
宮崎 諸県郡	児玉 ツヤ子
東京 世田谷区	飯泉 文蔵
〃 中野区	高橋 君枝
大阪 池田市	高田 義朗
秋田市	山崎 テイ
茅ヶ崎市	居木 邦子
横浜市	金谷 なを
富山 砺波郡	義井 松平
東京 渋谷区	坂田 登代子
逗子市	山口 千代子

福岡 市	野見山 保
横浜 市	長岡 和子
大阪 市	弥谷 衛
逗子 市	森田 文子
東京 世田谷区	長島 照子
〃 世田谷区	岩崎 勝
船橋 市	今井 清司
川崎 市	小田 純一
東京 目黒区	池澤 英夫
〃 目黒区	山本 春樹
〃 渋谷区	内藤 正次
〃 千代田区	田澤 志郎
〃 杉並区	皆川 恒也
〃 港区	弥谷 いね
市川 市	平田 実代
東京 世田谷区	新谷 五郎
〃 杉並区	藤森 松江
〃 中野区	布袋 りゑ
〃 世田谷区	長江 恵子
横浜 市	中村 芳雄
日野 市	塩田 政臣
東京 台東区	内田 兵治
〃 板橋区	大塚 三郎商店

岐阜 市	国島 五作
横浜 市	加島 義則
東京 世田谷区	片山 順喜
埼玉 春日部市	近藤 明美
東京 足立区	大和田 敏光
〃 世田谷区	薄井 捷
島根 簸川郡	荒木 肇
府中 市	小柳 邦江
東京 渋谷区	清原 泰男
〃 中野区	桜井 美保子
東京 府向市	佐野 一郎
東京 文京区	鈴木 善祐
神奈川 中郡	鈴木 啓介
横浜 市	竹田 修
東京 足立区	小川 ず江
横浜 市	牛島 豊子
東京 杉並区	市岡 秀子
横浜 市	北尾 英子
東京 大田区	片岡 勝太郎
〃 練馬区	間狩 喜代子
府中 市	藤谷 静枝
東京 世田谷区	田淵 賢
〃 渋谷区	福良 幸枝

兵衛県宝塚市 福崎 清
 東京都北区 平山 健
 〃 港区 本多 愛子
 三宅 春枝
 横浜市 横田常盤子
 東京世田谷区 横田 茂
 我孫子市 中村 正
 東京大田区 中村 寿子
 〃 大田区 朝比奈貞一
 横浜市 神奈川県善意銀行
 東京都杉並区 赤座 芳子
 相模原市 相沢 秀一
 鎌倉市 本荘 黎之
 埼玉県岩槻市 久地浦トキ
 茨城県下妻市 根尾小四郎
 田無市 北山 真也
 川越市 高橋 豊吉
 東京都世田谷区 林 真弓
 三鷹市 Mrs.Tow Takuchi
 & Family
 四十八年
 東京都大田区 横井 国伸
 〃 目黒区 石原 達夫

〃 葛飾区 塩田 和彦
 横浜市 高橋 英樹
 東京都港区 塩田 陽一
 〃 杉並区 村越 正員
 沼津市 伊藤 達正
 川崎市 関森 昭夫
 市川市 三橋 聡子
 東京都世田谷区 長島 照子
 愛知県東海市 関 綾子
 福岡県三池郡 広田 みき
 福岡県大牟田市 山中マサエ
 大牟田市 大牟田社会福祉協議会
 市川市 笹尾 しが
 東京都練馬区 三浦 健蔵
 〃 品川区 加藤 喜代
 吹田市 内橋 靖幸
 横浜市 上田 隆三
 東京都杉並区 藤田 富雄
 〃 東京善意銀行
 三鷹市 比田井 洵
 東京都品川区 佐藤 洋一
 神奈川県大和市 亀井 泰子
 横浜市 繁沢 美代

東京都大田区 石井 幸子
 武蔵野市 吉村 耕一
 三鷹市 寺澤 博子
 調布市 田頭 洋子
 東京都練馬区 面川喜代子
 大阪府 宇治 勲
 東京都葛飾区 宇田川倫子
 〃 中野区 八並 璉一
 横浜市 丸山 みよ
 東京都練馬区 大芝 一枝
 〃 文京区 山本 温
 〃 杉並区 上野 正也
 〃 練馬区 野口 鏡次
 埼玉県蕨市 町田 昭信
 東京都渋谷区 河田 正子
 〃 品川区 山田 清作
 島根県大田市 岡田 春栄
 東京都港区 保坂 泰衛
 〃 台東区 潮田 君代
 〃 大田区 安高ツタ子
 岐阜県大垣市 村瀬千代子
 名古屋市中区 名古屋市 ショーン・シールズ
 田町市 正来 昌子

東京都練馬区	大和 都
川崎市	豊嶋 耘三
武蔵野市	平田寅之助
東京都杉並区	河島 れん
〃 北区	木野村政次
茨城県竜ヶ崎市	平山 文子
東京都杉並区	吉田百合子
〃 杉並区	岡田 月子
〃 大田区	宮本 和男
〃 板橋区	湊 利満
〃 中央区	坂内 潤子
和歌山市	
〃 ジーン・S・ジュエラード	
名古屋市	ジョン・シールズ
東京都杉並区	簗田 長俊
兵庫県西宮市	佐野 辰雄
神戸市	望月 房子
京都市	坂堂 新市
静岡市	ジョン・デヤング
名古屋市	ジョン・シールズ
豊田市	豊田工業高等専門学校
大阪市	宮本 厚夫
大阪市	読売新聞大阪本社

秋田県本荘市	中村徹二郎
埼玉県岩槻市	原 政彦
東久留米市	小方 直
東京都文京区	谷 幸夫
〃 渋谷区	服部高麗子
静岡市	鈴木 明
神戸市	中井美保子
東京都練馬区	小林 鄭一郎
〃 台東区	西 博
〃 千代田区	語学教育振興会
名古屋市	ジョン・シールズ
札幌市	藤女子大学
小田原市	岩崎 愛子
東京都中央区	金田 かつ
〃 世田谷区	平石 豊子
東京都目黒区	大山 久子
東久留米市	左近 孝枝
〃 大田区	匿名
〃 〃	東社会福祉事務所
長野市	小林 濟
神戸市	伊藤 恭一
藤沢市	宮尾つゆ子
東京都杉並区	麻生 輝子

〃 世田谷区	藤木 健治
横須賀市	吉田 義範
京都市	
〃 シスター・ジョン・シュミット	
名古屋市	ジョン・シールズ
横浜市	出澤 豊
東京都目黒区	宮古 忠
藤沢市	高瀬 捷三
鎌倉市	高木 郁子
東京都文京区	北澤美喜子
小金井市	高田 米雄
東京都港区	清河 幸子
〃 中野区	中村みつ子
船橋市	小松多津子
東京都豊島区	伊藤 照子
〃 新宿区	藍野 祐子
川崎市	今中 久夫
東京都世田谷区	塚本久良子
〃 渋谷区	雨森巳之吉
盛岡市	瀬戸 正二
東京都目黒区	川又 嘉子
横浜市	神奈川県善意銀行
鎌倉市	田原 ツネ

調布市 中野 重男
 東京都葛飾区 赤坂国太郎
 武蔵野市 今野 福雄
 東京都渋谷区 福嶋 好陽
 清瀬市 川嶋 正一
 東京都中野区 沢田千鶴枝
 〃 世田谷区 山崎 翠
 〃 大田区 桑原 晟
 小平市 菅原 哲郎
 東京都目黒区 杉村 隆
 〃 大田区 太田 裕行
 〃 世田谷区 小倉喜代子
 〃 世田谷区 臼井 賢子
 横浜市 大井 清子
 〃 相川 豊子
 広島県尾道市 鍵谷 博美
 東京都世田谷区 長田喜代子
 大宮市 大島 トモ
 我孫子市 泉 菊女
 東京都北区 三田ルミ恵
 新居浜市 奥島 早苗
 横浜市 天野さかえ
 〃 幸路 英

東京都品川区 近藤 一雄
 〃 文京区 中村兼四郎
 小平市 苗村 寿一
 小金井市 福田 敏子
 東京都荒川区 長谷川泰造
 〃 中野区 直野 良平
 〃 世田谷区 矢島 美金
 保変市 浅上富士枝
 東京都杉並区 梶原 孝一
 船橋市 塚本あき子
 兵庫県西宮市 塚本 紘一
 鎌倉市 荻田 儀良
 東京都北区 太田 弘之
 新宿区 ロバート・X・ミラー
 武蔵野市 松浦 良子
 横浜市 一条 瑞恵
 東京都品川区 伊藤 清治
 三鷹市 古阪 秀代
 所沢市 新井 守正
 東京都目黒区 内藤 満喜
 福島県双葉郡 三瓶 宝次
 東京都江東区 松井 澄子
 東京都渋谷区 東京ユニオン教会

小金井市 赤羽 春子
 名古屋市 大島 紀人
 〃 ジョン・シールズ
 〃 Mrs. チャールズ・ニールヤン
 東京都渋谷区 飯田 恵
 小平市 齊藤喜久江
 武蔵野市 木村 篤子
 富山市 内田 晃
 名古屋市 ジョン・シールズ
 東京都 Mrs. JEANPEARCE
 横浜市 武田 耕一
 東京都新宿区 渡辺 勝彦
 多摩市 荻原 綾子
 東京都大田区 深川 文子
 〃 大田区 亀谷 治子
 〃 杉並区 藤井千代子
 松本市 長谷川みつを
 (以下は、次号に掲載いたします)

「加仁」総目次

一号一〇号
44・6・49・9

◇巻頭言 長沼弘毅

早期診断 (一〇一)

蟹無腸 (二〇二)

羊腸 (三〇二)

手術の理 (四〇二)

歯牙の間 (五〇二)

狡免良狗 (七〇二)

鷹の目 (八〇二)

医学用語寸感 (九〇二)

李廣將軍 飛將軍列伝 (一〇〇二)

◇加仁サロン

がんは癒る (一〇七)

受診のすすめ (二〇四)

月旅行とがんの治療 (三〇四)

田宮先生と久留先生 (八〇五)

七条小次郎

歳歳年年人不同 (九〇四)

胃がんとWHO (一〇〇八)

中原和郎
塚本憲甫

◇随想

かしの横穴 (一〇一〇) 渡辺 漸

紙 (二〇六) 鈴木守之佐

医者で文士であること (三〇六)

雪の越後湯沢にて (四〇四) 楠本憲吉

いまの若いもんは言葉を (五〇四)

晴 着 (六〇一九) 井川昭治

村の医家の子に生れて (七〇四) 山田 喬

羊羹と煎餅 (九〇二二) 瀬木嘉一

ロバート・コッホと鎌倉 (一〇〇三四) 山田 喬

渡辺 弘

◇鼎談

がんは癒る (一〇一二)

花村仁八郎 久留 勝 中原和郎

ここまでできたがん治療 (二〇八)



小林貞次 塚本憲甫 石川七郎

がんとその周辺 (三〇八)

武見太郎 久留 勝 中原和郎

がんの原因をきる (四〇六)

細川隆元 伊藤洋平 平山 雄

がんの早期発見をめぐる (五〇六)

中山素平 白壁彦夫 市川平三郎

がんの薬と放射線 (六〇二二)

村松博雄 小山善之 山下久雄

婦人科のがん (七〇八)

篠崎かよ子 小林隆 梅垣洋一郎

がん対策と企業の責任 (八〇八)

水野肇 藤井丙午 黒川利雄

東京都がん検診センターの開設をめぐる (九〇六)

美濃部亮吉 渡辺真言 塚本憲甫

吉田富三先生を偲んで(一〇〇〜一二二)

石館守三 黒川利雄 中原和郎

◇冬 瓜 の 記

左団次とのインタビュ(一一〜二〇)

高谷 治

二十年前の私の体験(二一〜一八)

円地文子

心頭滅却(三一〜二〇)

丸山勝久

ある心境、平野竜之助氏とのインタビュー(四〜二二)

高谷 治

乳房再生、広島旅行記(五〜二二)

五味道子

肝がんとたたかった成瀬仁蔵先生のこと(六〜四六)

高谷 治

肺がんとたたかった松尾栄太郎さんのこと(七〜二六)

金上晴夫

喉頭がんとたたかった芥川清己さんのこと(八〜三〇)

高谷 治

がんで逝った妻の想い出(九〜二六)

北原富雄

故緒方知三郎先生遺稿の始末記(一〇〜

三八)

元一患者の手記(一〇〇〜四二)

高谷 治

◇がんセンターめぐり

国立がんセンター(二二〜一九)

二宮 宏

癌研究会巻(三二〜二二)

伊藤一二

愛知県がんセンター(五二〜二四)

西 満正

大阪府立成人病センター(六二〜五〇)

太田和雄

北海道地方がんセンター(七二〜三六)

神前五郎

共庫県立がんセンター(八二〜三六)

市川健寛

国立病院九州がんセンター(九二〜三二)

入江一彦

千葉県がんセンター(一〇二〜五〇)

古賀成昌

◇横 顔

中原 和郎(一一二〜二二) 金上晴夫

藤本 政晴(二二〜二二) 金上晴夫

梶谷 鑑(三二〜一九) *

杉村 隆(四二〜二〇) *

白壁 彦夫(五二〜二八) *

福岡 文子(六二〜五八) *

瀬木 嘉一(七二〜二九) *

荻野 久作(八二〜三四) 山田 喬

佐藤 隆一(九二〜三〇) 北岡久三

相川 エミ(一〇二〜四八) *

◇作品紹介 横山 茂

十七歳の絶唱(一一二〜三三)

小説クガン病棟(三二〜二六)

みんなが嘘をついている(四二〜二二)

がんからの逃走、清睦如(五二〜三〇)

いのちある日に。みきの病床日記(六二〜六〇)

虹の橋を渡って行った順子(七二〜三二)

落花抄、娘白蘭への鎮魂歌(八二〜四〇)

がんのひとり発見(九二〜三六)

ありがとさん(一〇二〜四五)

◇質問コーナー

乳がん・子宮がん(二一、二四) 渡辺 弘
 笠松達弘
 胃が ん(三、二四) 市川平三郎
 肺が ん(四、二四) 金上晴夫
 舌がん・こう頭がん(五、三二) 竹田千里
 腎がん、膀胱がん、前立腺がん(六、六八) 松本恵一
 小児がん(七、三四) 伊勢 泰
 直腸・大腸がん(九、三八) 小山靖夫
 白血 病(一〇、五四) 坂野輝夫

◇あしあと

永富独嘯庵(一、表紙3) 埴 嘉之
 華岡青洲(二、三〇) 夕 夕
 山極勝三郎(三、二七) 夕 夕
 レントゲン(五、二九) 多賀須幸男
 曲直瀬道三(六、五九) 大塚泰男
 滝沢延次郎(七、三〇) 井出源四郎
 クスマウル(九、二五) 多賀須幸男
 ビルロートとブラームス(一〇、三二)

◇その他

仁井谷久暢

創刊のことは(一、四) 石坂泰三
 創刊によせて(夕、五) 藤井丙午
 最近の国際会議から(五、一八) 杉村 隆
 仁井谷久暢
 久留勝先生追悼記
 ある追憶(六、四) 長沼弘毅
 命の恩人・久留先生(六、八) 藤井丙午
 久留勝先生追悼(六、一一) 武見太郎
 久留勝君逝く(六、一四) 中原和郎
 久留勝先生を悼う(六、一六) 山本信次郎
 WHO国際がん情報センターについて(六、四二) 塚本憲甫
 話題の研究から
 人癌ウイルスの幻想と現実(六、五四) 日沼頼夫
 同級生交歓(七、四一) 塚本憲甫
 長沼弘毅
 国立がんセンターの施設整備のプランニング(八、二六) 石戸利貞

(53ページより)

約五百例を数えるのみである。入院待機患者数も次第に増加していることを考え六階病棟の開設が急がれている。紹介予約制を外来診療に採用したことは上述の如く、外来の雑踏は避け得、診察医は一人一人の患者に対し充分なる診療時間を持てるようになった。このことは患者との対話時間が多くなり、がん診療という特殊な面では有利であると考えられる。

◆むすび

千葉県がんセンターは、開設以来十月を経過し、漸く歩き出したというところである。然しながら当初計画にもられた企画もまだ完全に消化されておらず、なお、未完成の面が多い。殊に内容の充実は焦眉の問題であり、之等が一日も早く整備されることを念願しつつ、スタッフ全員、研究に診療に努力しているのが現状である。

(診療部長 大森幸夫記)

点
描

築地・明石町

築地と明石町は隣りあっていて、本願寺からすこしあるくと、いつの間にか明石町に移ってしまう。すると、聖路加病院のしよしやな建物が目にうつってくる。

居留地時代からの歴史のある聖路加病院は、戦前、戦中、戦後の米軍接収中、そして現在に至るまで、あの屋上に十字架のついた塔のある建物是不変っていない。それは、本願寺とともに築地・明石町のシンボルである。三島由紀夫は、その小説「橋づくし」の中で聖路加病院の夜景を次のように描写している。

……やがて左方に、川むこうの聖路加病院の壮大な建物が見えてくる。それは半透明の月かげに照らされ、うつ然と見えた。頂きの巨きな金の十字架があかあかと照らし出された。これに待するよように、航空標識の赤い灯が点々



と屋上と空とを画して明滅しているのである。病院の背後の会堂は火を消しているが、ゴシック風のばら窓の輪郭が高く明瞭に見える。病院の窓々は、あちこちにまだ暗い灯火をかかっている。

聖路加病院の東側に、慶応義塾発祥碑がある。方形の黒御影石の上に色御影石で彫られた書籍の表面には、有名な「学問のススメ」の言葉が刻まれている。

これは、米軍が接収して軍病院として使用のころの風景であると思われる。

天八人ノ上二人ヲ造ラズ、人ノ下二人ヲ造ラズ、この言葉を読み、武子の歌を口ずさむとき、わたくしはようやく築地川の在りし日の水のためたいが蘇って来るのを感じる。

これは、詩人の野田宇太郎氏がその著『掌篇文学散歩』の中で述べていることばである。

(カメラと文
横山 茂)

俳
句

島祭五句

菊池 芳女

つむじ風春駒の袖あらはにす

松籟に春駒颯と舞い納む

飄々と春駒舞へる母郷かな

小男の歌ふ春駒朗々と

雪嶺の神が見て居るつぶろさし

星神楽とは、佐渡の羽茂町に伝わる郷土芸能、股間に播粉木のような棒を挟む性的な踊りである。

(国立佐渡療養所

「歌と評論」同人)

財団法人がん研究振興会役員
評議員名簿 (五十音順)

(昭和四十九年八月末現在)

☆役員

- 会長 石坂 泰三(経済団体連合会名誉会長)
副会長 岩佐 凱美(富士銀行会長)
理事長 藤井 丙午(参議院議員)
常任理事 花村仁八郎(経済団体連合会専務理事)
理事 芦原 義重(関西電力株式会社会長)
理事 石川 七郎(国立がんセンター病院院長)
理事 川上 六馬(元厚生省医務局長)
理事 木川田一隆(東京電力株式会社会長)
理事 小林節太郎(富士写真フイルム株式会社会長)
理事 武見 太郎(日本医師会会長)
理事 武田長兵衛(武田薬品株式会社社長)
理事 長沼 弘毅(評論家)

- 理事 林 弘(国立がんセンター連
 営部長)
理事 藤野忠次郎(三菱商事株式会社社会
 長)
理事 堀田 庄三(住友銀行会長)
理事 矢田 恒久(第一生命保険相互会
 社会長)
監事 田実 涉(三菱銀行会長)
監事 弘世 現(日本生命保険相互会
 社社長)
監事 長谷川周重(日本化学工業協会会長)
高橋 吉隆(朝日麦酒株式会社社長)
佐藤保三郎(麒麟麦酒株式会社社長)
根津嘉一郎(東武鉄道株式会社社長)
日向 方齐(住友金属工業株式会社社長)
三浦 懋(株式会社島津製作所会長)
安川 寛(株式会社安川電機製作所会長)
横山 通夫(中部電力株式会社会長)

☆評議員

財界

- 赤崎 兼義(愛知県がんセンター研究所長)
今永 一(愛知県がんセンター病院長)
梶谷 銀(癌研究会付属病院院長)

- 釜洞醇太郎(大阪大学総長)
木村樺代二(国立がんセンター病院副院長)
小山 善之(国立病院医療センター
 病院副院長)
相良 貞直(日本対ガン協会事務局次長)
島田 信勝(慶応義塾大学医学部名誉教授)
須田 正己(愛媛大学医学部長)
千田 信行(大阪府立成人病センター所長)
日比野 進(国立名古屋病院長)
山下 久雄(慶応義塾大学医学部放射線科教
 授)

☆免税の取扱いについて

財団法人がん研究振興会は、試験研究法人としての取扱いを厚生大臣から認可されている財団です。従って、本会に寄付または賛助された金額につきましては法人、個人を問わず免税の対象となります。また、48・2・12付で、厚生大臣から、相続税免除の法人であることを認められました。その証明書を必要とする方は、本会の事務局までお申し出下さい。

あ)))))
と)))))
が)))))
き)))))

昭和四十四年に創刊した「加仁」は、ここに十号を迎えました。

々季刊々と銘うってスタートしたのですが、いろいろな理由のため、約五年の間に、十回発行するという経過を辿りました。つまり、平均すると、年二回発行という実績になりました。しかも、さいきんは、々年刊々という発行状況に定着してしまいました。これでは々季刊々にならないので、関係者一同、ここで緊禪一番、発行に努力をしています。

さて、本号には、「鼎談」に々吉田富三先生を偲んで々を、「冬瓜の記」に緒方知三郎先生のご遺稿にまつわる記を、それぞれ掲載しました。期せずして、がん学者の泰斗である両先生を追悼する原稿を読者にお目にかけることになりました。

故久留先生のご発案により創刊した本誌は五年間を経過しました。生みの親である久留先生は創刊号には、表紙のデザイン、見出しの凸版なども、ご自分で画されました。毎号、表紙(2)に掲載している「表紙のこ

とば」はすでに読者の方がたはご存知のとおりですが、「鼎談」「加仁サロン」「あしあと」「冬瓜の記」などは、いずれも久留先生の揮毫になるものです。編集部としては、今後ともこの凸版を掲載して行く方針です。

十号を一つのエポックとして、これからも充実した編集をするように関係者一同努力していますので、ご支援下さるようお願いいたします。なお、バック・ナンバーの見出しに便利な為一号一〇号の主な記事の総目次を

掲載しました。

本号の印刷作業を進めているさ中、六月七日に塚本憲甫先生が亡くなられました。本号掲載の「胃がんとWHO」という塚本先生の

稿が遺稿になってしまい、まことに感慨無量です。「加仁」誌のため積極的な指導をいただいた先生のご冥福をお祈りいたします。(榎本)

「加仁」編集同人

編集顧問

中原 和郎

石川 七郎

木村禮代二

山田 喬

市川平三郎

伊藤 一二

笠松 達弘

北岡 久三

榎谷 和男

高谷 治

仁井谷久暢

林 弘

三輪 潔

渡辺 弘

榎本 義雄

編集事務局

加仁 第10号

昭和四十九年九月 十日印刷
昭和四十九年九月十五日発行
定価 二百二十五円 千五十五円

発行人 藤井 丙午
編集人 山田 喬

発行所

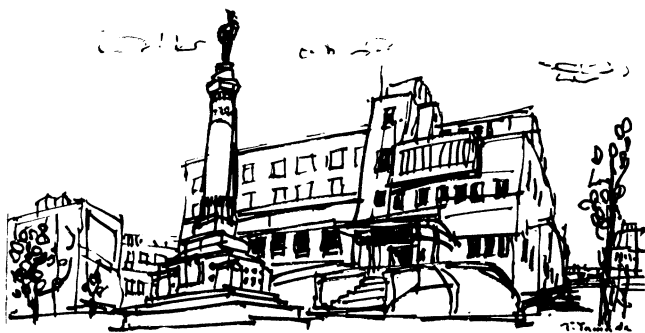
東京都中央区築地五―一―一
国立がんセンター内

財団法人 **がん研究振興会**

電話(542)二五一一(代表)

郵便番号 一〇四号
印刷所 富士越印刷KK

加
仁
第十号



昭和四十九年九月十日印刷
各
行
發行人